

「ビツクリしましたわ」

「は、は、は、わたしの方でビツクリしましたよ、また一人心中が持ちあがるのぢやないかと思つて——」

「そんな事はありませんよ」

「それでも危ないものだ、お雪さん、もつとこつちへお出でなさい」

「どうして？」

「お前さんの、顔の色さしがいけません、もつと明るいところへお出でなさい」

「随分明るいちやありませんか」

「自分で自分の顔がわかりますか？」

變なことをいふ神主様だと思ひましたが、その時に、またふとわたしの胸に浮んだのは、では、自分でこそわからないが、この頃のわたしの顔色は、いつもと違つてゐるのではないかしら。若しかして、わたしは林の中をしょんぼりと歩いてゐた淺吉さんの顔の色、あんな色が現れてゐるのではないかと、それを思ひ浮べて何ともいへない厭な心持ちに打たれました。人が見たら、わたしの顔にも、あんな厭な色が浮いてゐるのではないか知ら……その時に神主様はまた高らかに打ち笑ひ、

「お前さんの顔は可愛ゆい邪氣のない顔でしたが、この頃、陰氣になつて來ました、こんなとこ

ろにゐると死にたくくなりますから、こつちへお出でなさい」

といつて神主様は、わたしの手を取つて、ズン／＼と鏡小屋の方へ引ばつて行きました。

辨信さん——それから、わたしはあの神主さんに伴はれて鏡小屋まで參りましたが、すべてが何といふ陽氣なことせう。

あの神主さまの顔はかゞやくばかりです、といつても神様のやうに神々しく近寄り難いかゞやきではなく、人間が始終何かに満足しながら生きてゐるやうなかゞやきであります。わたしを離れ岩の上から引きつれて行つた手の温かいこと、こんな寒いところに、ひとり行をしてゐると思はれませんでした。

爐へ火をたいて、わたしを温まらせながら、わたしの顔を見て、につこりと笑つた眼の細い、頬のたつぷりとした、蔭や毒といふものゝ微塵も見えないあの面立、活きた福の神様といふのが、これだらうと、つく／＼、わたしはその時に感心致しました。

併し、この福の神様は、俵もたくはへてはゐないし、金銭も持つてはゐないし、そば粉か何かを毎日少しづゝ食べてゐるだけださうです。

この神主様は毎朝、お光を仰ぐために乗鞍嶽の頂上の朝日權現様まで、人の知らないうちに登り人の知らないうちに歸つて參ります。足の達者な人でも日歸りには六つかしい山路を、この神主さんは、ほんの数へるだけの時間でいつたり來たりしてゐますが、とても眞似が出来ないとい

つて、山の案内者達も舌をまいてゐるのでござります。

「お嬢さん、あなた、陽氣にならなきやいけません、陽氣になるにはお光を受けなきやなりません、お光を受けて身のうちをほらひ清めなきやなりません、人は毎日毎朝、座敷を掃除することだけは忘れませんが、自分の心を掃除することを忘れてゐるからいけません、自分の心を明るく、明るい方へと向けて、ほらひ清めてさへ行けば、人間は病といふものもなく、迷ひといふものもなく、悩みといふものもないのです、ですから、何でも明るい方へ向いて、明るいものを拜みなさい、一つ間違つて暗い方へ向いたら、もういけませんよ、暗いところにはカビが生えます、魔物が住みます、さうして、いよく暗へ方へ暗い方へと引いて行きます、暗いところには、いよく多くの魔物の同類が住んでゐて、暗いところの楽しみを見せつけるものだから、遂に人間が光を厭うて闇を好むやうなことになつてしまふと、もう取返しがつきませんよ……早いとへが、この間のあの二人をごらんない、あの年とつた、いやに色けづいたお婆あさんと、それにくつつきよりの若い男とをごらんない、あれがいゝ證據ですよ、あれが明るいとところから、わざ／＼暗いところへ暗いところへと擇つて歩いて、その腐りきつた楽しみにふけつたものだから、ついあんな事になつてしまひました、外の空氣のさえ渡つて、日の光がたまらないほど愉快な小春日和にも、あの二人は、拙者がゐないとこの小屋の中へはいり、小屋をしめきつては、暗いところでふざけきつてゐました、だから、わたしは山から歸る早々、それを見つけると戸を開

け拂つて、二人をはらひ出したものです、二人は、拙者の振り廻す御幣をまぶしがつて、恐れちんで逃げ出したが、逃げ出して暫く経つと、またあの森かげへ隠れて、くつつき合つてゐましたよ、とても度し難いといふのはあれ等でせう、放つて置いてもいゝ加減するとうだつて腐りきつてしまふ奴等ですが……みん事、魔物の、餌食になつて、二人共、沼へ落ちて死んでしまつたが……いやはや、罪のむくいとはいへ氣の毒なものさ……お嬢さん、あなたなんぞは年も若し、今が大切の時ですから、暗い方へ行つはなりませんよ、始終明るくしてお出でなさいよ、さうしないとカビが生えますよ、毒な菌が生えますよ……光明は光明を生み、悪魔は悪魔を生みますよ、ほんとに、あなたはこの頃顔色が悪い、この間中のさえ／＼した無邪氣な色が消えかゝつて行く、氣をおつけなさい……」

神主様から、斯ういはれた時、わたしは思ひきつてこの神主様にこの頃中の胸の悩みをすつかり打ち明けてしまはうかと思ひました。

辨信さん——善きにつけ、悪しきにつけ相談相手といふものゝないわたしはこの時、洗ひざらひ、自分の今までのした事と、悩んでゐることをこの神主さんに打ち明けて、どうしたらいゝか教へていただかうと思ひましたが、神主さんの顔が、あんまりかゞやかしいものですから、ツイ隠してしまつてそれがいへませんでした。

話せば、相當の同情も持つて下さらうし、解決もつけて下さるかも知れませんが、それにしては、

あんまりこの方は明る過ぎると思ひました。明る過ぎるといふのはをかしいやうですが、この神主様は明るいところばかり知つて、暗いところを知らないのぢやないか知らと、わたしは危ぶみました。

それならば、なほ結構ぢやありませんか、その明るい光の前に、すべての汚れをブチまけて、それを清めていたゞきさへすれば、この上もない仕合せではないか……と一通りはお考へになるかも知れません。

併しね、辨信さん、自分が一度病氣になつた覚えのないものには、病人の本當の苦しみといふものはわかりませんのね、たゞ明るいところばかり見てゐる人は、それはこの上もなく結構には違ひありませんが、暗いところの本當の樂しみ……または苦しみといつたものに本當の理解がしていたゞけるか知ら、それが、ふと、わたしの胸にあつたものですから、ツイ、わたしはこの神主様の前に一切を打ち明けることを躊躇致しましたのです。あまりにこの神主様は、すべてが明るく、すへてがかゞやかし過ぎます。

それが辨信さん、あなたならば……あなたは明るいといふことを知りませんから、あなたに向つては、たとへば、どんな自分の罪でもけがれでも、すつかり打ち明けて恥かしいとも悔しいとも思ひませんが、あの神主さんの前では、まだどうしても自分を開いて見せやうといふ氣になれませんでした。

そこで、口先をまぎらかすやうに、わたしは神主さんの言葉尻について、

「けれども神主様、暗いところがあればこそ明るいところもあるのぢやありませんか、夜があればこそ晝もあり、悪があればこそ善もあるのぢやありませんか……人はさう明るくばかり活きるものぢやありませんまい、罪と汚れに生きてゐるものにも貴いところがあるのぢやありませんまいか……」

といひますと、神主さんは相變らずニコ／＼として、事もなげにそれを打ち消して、

「そんな事があるのですか、明るい心を以て見ればこの世界に暗いといふところはありませんよ、善心から見れば悪なんといふものが存在する場所はありません、悪といふのはつまり人間に勢ひをつけるために、それを征伐させるために、神様がこしらへた道具なのです、悪といふものは本來あるものぢやありません、なかに貴いものが罪と汚れに生きられるのですか、罪と汚れの中にも死なゞいのが貴いものですよ」

「ですけれども神主様……この世には悪いと知りつゝそれを樂しみたくなり、怖ろしいと思ひながらそれを慕はしくなつて行くやうな心持をどうしたものでせう」

「それ／＼それが闇の物好だ、すべての罪は物好から初まる……お前さんにや今おはらひをして上げる」

といつて神主様は大きな御幣を取つて、わたしの頭上をはらつて下さいました。

さうして、わたしはこの鏡小屋を出た時に、明暗二つの世界の中に浮いたり沈んだりするやうな心持でありました。

その夜の夢に、あのイヤなおばさんが現れて、さげすむやうに、わたしの顔を見て笑ひ、

「何をクヨクヨしてゐるの、お雪ちゃん……もしねんねが生れたら大切に育てよお上げなさいな、それがイヤならおろしておしまひ、間引いておしまひ、殺しておしまひ——」

あゝ辨信さん、この次に、わたしが、あなたに手紙を書く時、わたしの心持がどんなに變るかわかりますか。

十五

駒井甚三郎と田山白雲とは房州南端の海岸を歩いてゐる。

駒井は輕快な洋装をして手に鞭を持ち、白雲は鈍重な形をして畫框を腋にかい込んでゐる。二人共に眼は海上遠く注がれながら、足は絶えず砂濱の上を歩いてゐる。

田山白雲は房州に来て、海を見ることの驚異に打たれてから、頻に海を描きたがつてゐるらしい、白雲がいふ。

「いや水の色にからまで變化があらうとは思ひませんでした」

「線と點だけでこの變化が現しきれますかね？」

と二人が相顧みて立つ、

左様——谿谷の水と河川の水とは東洋畫の領分かも知れませんが、海洋の水は色を以て現した方が、といふ氣分がしないでもありません」

「線を以て色を現し得るといふ貴君の見識が動き出しましたか？」

「さういふわけではありません……つまり淡水と鹹水との區別かも知れませんが、淡水は線を以て描くに宜しく、鹹水は色を以て現すのが適當といふ程度のものか知ら……」

「一概にはいへますまい——併し、東洋畫で海を描いて成功したものはありませんか？」

「ないことはないでせうが、私はまだ不幸にしてブツつかりません」

「水の變化が多過ぎるからでせう」

「左様かも知れませんが、また變化が少な過ぎるともいへます」

「貴君はいつぞや、小湊の濱邊に遊んで、海の水の變化と感情と生命とを私に教へましたが、貴君達の見る變化とわれ／＼の見る變化とは違ひます」

駒井甚三郎は海水の一部分だけに眼を落して斯ういふと、白雲は、やはり廣く眼を注いだまゝで、

「どう違ひますか？」

「われ／＼は先づ海の水の色を見ます、それも色の變化を貴君のやうに感情的には見ないで、數學的に見るのです」

「色を數學的にですか……それは、どういふ見方でせう？」

「この水の色の變化が幾通りあるかといふことを調べます、手にすくひ上げて見れば透明無色なる水も、處により時によつて色々に變化があるのは誰も見る通り、それを學者は精密に調べて十一の度數に分けてみました」

「は、あ、つまりこの水の色の種類に十一の變化があるといふ譯ですね」

「さうです……けれども、海の水には、まだ學者の十一には當てはまらない色があるやうに思はれます、十一の標準もやがて變るでせう」

「さうですか、さういふ事も、やはり學者の領分でなく畫家がやりたいことですね、圓山應舉などにやらせると、モツと精密に色わけをするかも知れません」

「いや、精密な色わけは、やつぱり西洋人の方が上でせう水の色を分類するのみならず、水の溫度をも彼等は精密に研究してゐますよ」

「成程……水の溫度といふものがありましたね、それも數字で現さねばなりません、溫度の高低が、色の深淺と關係がありますか知ら？」

田山白雲も知らずく頭を數字の方に引き向けられました。

「溫度を計るといふうちにも、時間と場所はもとより、海面と海中と海岸とでそれ／＼溫度が違ひます、それを計るには第一に精良なる寒暖計といふものがなければなりません、その寒暖計を

適度の海中に下ろすにはまたそれに相當した機械が必要です」

「成程——」

「さうでなければ、海水のある程度の水を一々汲み上げて、それを外氣の影響を受けないやうに持ち上げる器械が必要です……私はこの頃その器械を一つ工夫しました」

「は、あ、さうしてこの水の温か味といふものは大抵どの位あるものですか？」

田山白雲は、海を見て、その感情の奥のひらめきに打たれて、水が活きてゐると叫んだのは今に始まつたことではないが、駒井のやうな冷靜な見方にもまた相當の興味を引かれると見えて、水の色を十一に分類したその根據と種類を、もう少し尋ねても見たし、また水の溫度を一々數字的にも知つて置きたいらしい。

「海の水の溫度は大抵卅度より上にのぼる事はなく、零點の下三度より降ることはありませんよ」

「その一度二度といふのは、貴君がお考へになつた器械によつてつけたのですか？」

「いえ、物の寒暖を計るには西洋では學者の間に一定の器械があるのです、つまり寒暖計といふものにも幾種類もあつて、學者の間では、そのうちのCといふのを用ひます、昨年十月私がそれによつて調べて見たところによると、この邊の外洋の表面の溫度は廿四度前後、三百尺ほど下ると十七度前後になつてしまひます」

「下へ行くほどつめたいのですね」

「無論です……北海の方へ行けばモット相違があるでせう、温められた河の水が注ぎ込む近海ほど温度が高いのですね、今年の七月土用の頃、水田の中の水をはかつて見たら四十度から五十度の間でありました」

「さうですか」

田山白雲も、こゝでは水が活きて五情をほし、まゝにするといふ氣焔を吐き兼ねて、駒井のいふところに傾聴するのみであつた。駒井は水のやうにすましこんで白雲の頭へはいる程度の數字を擇ぶやふな態度で、

「われ／＼は、水の色と、温度とを數字的に見るだけでは足りません、その成分をまた數字の上に分けて見たくなるのです、つまり、水の中に含んでゐる様々の有機物を分析して、それを表に現して見ることに——それがまた進めば進むほど趣味もあり、實際上にも密接な關係を生じて來るのです」

「川の水と海の水とは成分がちがひませうな？」

「それは無論違ひますとも、川の水だけでさへ種々雑多な相違があり、海の水とても一樣にはいへない、たとへば淡水の水は二三寸も張れば人が乗つても危険はないが、海の水は二三寸では子供が乗つても破れることがあります」

「さうですか知ら、われ／＼は單に川の水は甘い、海の水はからいといふ程度にしか見てをりま

せんでした」

「その海の水のからさ加減もところによつて非常な相違のあること、川の水の甘さにも相違のあるのと同じことです」

「鹽加減にも違ひがあるのですか？」

「ありますとも……普通の海水は大抵千分の三十四五位の鹽分を溶解してをるのですが、それでも物を浮かす力は到底河の水の比ではない……これは海ではありませんがアメリカのユタといふところにある湖は千分の二百五十も鹽分を含んでゐるさうですから、人間が落ちてもどうしても沈まない、この湖では泳げないものでも決して溺死をするといふことがない、また身投げをしても死ねないからをかしい」

「はゝあ……さういふのですか」

田山白雲は感心して沈黙させられてしまひました。自分の印象的な感激的な頭を以て、斯様な穩かな説明を聞かせられると、感心の度が深いと見える、駒井にあつては尋常茶飯の説明も、持たぬ者より見れば持つ者の知識の影が大きい過ぎるほど大きくうつるのも免れ難い弱點かと思はれる。

斯くて二人はまた海をながめながら海岸を歩んで行くうち、いひ合はせたやうに二人の眼がハタと地上に落ちて足をとどめました。

駒井と白雲とが急に踏みとどまつた砂濱の上には、ぬかごにしては大きく、さつまいもにしては無かつこうな根塊らしいものが、振りまいたやうに散亂してをりました。

田山白雲は、物珍しさうに、わざわざひざまづいて、その子供のこぶしほどの大きな根塊を一つ拾ひ取つて打ちながめ、

「何だらう？」

會話の興味を中斷して、白雲はその根塊の吟味に取りかゝる。

見慣れない小さなグロテスク、それも一つや二つならば兎に角、砂濱の可なりの面積の間に振りまかれたやうに、ほとんど無數に散亂してゐるものですから、白雲も特に注意をひかれたやうで特に手を取つて熟覽して見たけれどもその何物であるかは鑑定に苦しむ、たゞぬかごの形をして大きく、さつまいもに似て無かつこうな一種の植物の根塊であることだけは疑ひないらしい。白雲は腰をかゞめたまゝで、その根塊の一つ二つを拾ひ、しさいに打ちながめてゐると、駒井甚三郎は立ちながら白雲の手元をのぞき込み、

「これはジャガタラいもですよ」

「え、ジャガタラいも……？」

「やうです」

田山白雲はまだジャガタラいもを知らなかつたが、駒井甚三郎はよくそれを知つてゐる。たゞ駒

井がいふかしげにそのジャガタラいもをながめてゐたのは、ジャガタラいもそのものが珍しいのではなく、この邊では、まだこれを栽培してゐない筈なのに、斯うも多數に海岸に散亂してゐるのは何ゆゑだらう、駒井に取つては、それが合點が行かないので、同時にこれは難破船でもあつたのではないかといふ疑ひも起り、難破船とすれば、それはこの近海に近づいた外國船であらうといふことまでが念頭にのぼつて來るので、可なり遠くまで考へながら立つてゐるのであります。

田山白雲は、そんな事は頓著なしに、たゞ單純にその根塊を珍しがつて、

「は、あ、これが音に聞くジャガタラいもですか？」

關東で清太いもといふのがこれです、ところによつて甲州いもだの朝鮮いもだのといつて、上州あたりでも可なり作つてゐる筈ですが……」

「いや、拙者は、はじめてお目にかゝりましたよ、うまいですか？……」

田山白雲は、そのうまさうな一つをヒネクリ廻すと、駒井が説明して、

「うまいといふものぢやないが、滋養に富んでゐて常食にもなります」

「米の代りになりますか？」

「外國では米の代りに常食としてゐるところがあるさうです、濃厚な肉食をしてゐる西洋人は、副食物のやうにして、好んでこれを用ひます、ですから、或はこのジャガタラは西洋人が落した

ものかも知れませんが、若しさうだとすれば、ワザと捨てたのか、それとも船がこぼれたのか……。
 「寝つてはゐないやうだから、ワザと捨てたんではありますまい、この邊の百姓が作つて、ほして置いたのを波にさらはれたのではないかしら？」

「左様かも知れません……併し、まだこの邊の百姓がジャガタラいもを作つてゐるのを見かけませんか……」

駒井はまだこのジャガタラいもの存在に不審が解けきれないでゐると、白雲は畫框を岩の上にざし置いて、懷中から風呂敷を出して砂上にひろげ、

「それはどうまいものなら持つて行つて食べて見ませう……西洋人に食へるものがわれ／＼に食へないといふ筈はない」

といつて、その根塊の特にうまさうなのを選んで一々拾ひ上げてその風呂敷に包みはじめました。田山白雲は晚餐の賞美の料としてのジャガタラいもをブラ下げて行くと、駒井甚三郎は白雲のために代つて畫框を受取つて、海岸を歸途につきました。

その時、駒井はこんな事をいひました。

若し、自分が海外の何れへか植民をしやうといふ場合には、取り敢ずこのジャガタラいもを植ゑつけて見たい。その手初めにこの地方へ栽培を試みやうと思つたが、ツイにそこまで手が廻らなかつたのが残念だ。船を造ることに急にして、農業の事を忘れたのが残念である——植民は農業

から初めなければならぬ——といふやうな事をいふ。

「いけないのは、武力を以て従來の土著の者を征伐してその耕した土地を奪はうといふことです、それで一時成功しても永く續かう筈がありません、やはり、新天地を求めて自分から鉄を下ろして土地を開かなけりやうそです」

駒井はこの頃新らしくそれを悟つたものゝやうにつぶやく。

「その新天地といふのは一體どこにあるんです？」

白雲がたづねる。

「至る所に新天地はありますよ、われ／＼は先づこのジャガタラの地方へ行つて見たいと思ふ」

「ジャガタラとはどつちの方面ですか？」

「この海を南の方面へ行きます——大陸に渡つて見やうか、或は孤島に根據を置いて見やうか、その邊の事を考へてゐます」

駒井は絶えず、その行くべき新天地の空想を頭に描いてゐる。駒井の頭では空想ではないが、白雲にはその内容を實際的に想像する由がないから、

「兎に角、新しい國を開いて、その王になるのは愉快な事には違ひない」

「それは違ひますよ、王にならうなんていふ心がけが違つてゐます、われ／＼が新らしい土地を開かうとするのは、自らも王にならず、人をも王にせず、人間らしい自由な生活のみ求めたい

からです……われ／＼の海外移住を、山田仁右衛門のそれと比べると違ひますよ、われ／＼は王にならんがために外國へ行くのぢやなく、農にならんがために行くのです」

「いゝですとも……それでも結構ですよ、その場合には、拙者も筆をなげうつて鉄を取る位は雑作ありません」

「筆をなげうつ必要はありませんね、食物を土から得て、その次に自分の天分を思ふさま發揮して見たいぢやありませんか」

「成程」

「貴君は繪筆を持ちながら、さういふ事をお考へになつたことはありませんか、つまり衣食の事をです」

「衣食の事……？それを考へないでをられるのですか、これでも妻も子もある男ですからね」

白雲は、まじめにいふ。

「要するに衣食のためですね……主人につかへれば主人より衣食を受くるむくいとして自分の自由を犠牲にすることもあるでせう、衣食のために心ならずも美術を賣物にするといふ心苦しきもないではありませんまい」

「ありますとも、大ありでさあ」

白雲の磊落に答へたのがしをらしく聞える。

「だから、どうも人間は衣食を土から得てゐないと、本當の自由が得られないやうです、自由のないところでは生きた仕事は出来ませんからね、ところで、その土といふものが今ではみんな大名のものになつてゐますから、それを耕して見たところで、得るところは大部分大名に取られてしまひ、残る所の極めて僅な収入で生きて行かねばならぬ百姓ほど哀れなものはないでせう——して見ると大名の所有以外に耕すべき土地を求めなければならぬ道理です」

駒井は、近ごろ漸く深くこの感じを持たせられたと見えてそのいふ事が親切です、白雲はそれをも感心して、

「成程、その通りです」

十六

二人が外出のあと、支那少年の金椎は料理場で料理をこしらへてをりました。

その以前は駒井とほとんど二人暮しでありましたから臺所の仕事も二人前で済みましたけれど、この頃は客がふえましたから金椎の仕事も多くなつたのは當然です。

君子は庖厨に遠かると聖人がいひましたが、金椎のこの頃は庖厨の中で聖書を読むの機会が多くなりました。

それは金椎自身が料理は自分の職分と考へてゐたから、人の少ない時は少ないやうに、多い時は

多いだけの努力をして、この方面には誰にも手数も心配もかけまいとの覚悟を以て、この城廓の大膳の大夫であり、大炊頭を以て自ら任じてゐるらしいのです。

殊に、人が幾人ふえやうとも、先天的に話相手といふものゝ見出せない不具な少年に取つては却つて、この臺所の城廓が安住所でもあり避難所でもあり事務所でもあり讀書室でもあつて、甘んじてここに納まつて、職務以外の悠々自適を試みてゐるといふわけです。

とはいへ、その職務に對しても金権はまた大なる研究心を持つてゐる。研究といふのは自分が食事をつかさどる以上は、成るべくよき材料をよく食べさせたいといふ念願、如何にしたらば、よき材料が得られ、それをうまく人に食べさせる事が出来るかといふ工夫であります。

金権はこの範圍で、絶えず料理方の研究を頭に置いてゐる。それは豫ねてより自分にも料理の心得があつて、外國船に乗り込んでゐる時分にも支那料理について、なかなかの手腕を持つてゐることが船長を喜ばせたり、乗組員に調法がられたりしてゐて、ある外國人の如きは金権の庖丁でなければ箸を取らないといふのもありました。

こゝへ來ても、駒井甚三郎のために金権が獨得の支那料理の腕前を見せて、一方ならず駒井を驚かせたものです。

殊に感心なのはかういつた不便利だらけの生活をりながら、比較的乏しい材料に不平もいはず、その少ない材料の範圍で、いかにもうまい手際を見せて、駒井の味覺に満足と與へる働きに感心

しないわけにはいきません。

その金権の料理方の腕前を駒井が推賞すると、金権は惡びれもせず、

「料理では支那が世界一ださうですね」

駒井は鉛筆を取つて、

「ナニ、世界一、誰ガサウ言ツタ」

金権はそれを見ながら口で答へる、

「西洋人がいひました、料理では支那が第一、日本が第二、ヨーロッパは第三であるといひました」

「ソレハマタ、ドワイフワケデ」

「西洋人が申します、支那の料理口で味ふに宜しい、日本の料理眼で見ると宜しい、西洋の料理鼻でかくに宜しい——そこで、つまり料理は食べるもの、味はつて宜しい支那の料理が第一でございますといひました、併し、わたしの料理などは問題になりません、眞似をするだけのものでございます」

駒井甚三郎はこの一言に興味を感じ、果して支那料理なるものがそれほど價值のあるものか知らとの疑ひを起し、最近江戸へ書物材料を集めに行つた機會に、料理書とおぼしいものを二巻ばかり持ち來たつて自分が感心して讀んだ後に、それを金権に與へると、金権は喜んでそれを大きな

紙に寫し取つて壁間に掲げました、今も金椎の頭の上に見ゆるところのものがそれです。

この壁間に掲げられた料理の書といふものは無點の漢文ですからたれにも樂に讀みこなせるといふ代物ではない、また讀みこなしに、わざ／＼入つて來やうといふほどの者も無いところですから、たゞはりつけた當人だけが朝夕それを讀んで胸に納めるだけの事になつてゐるが、ツイこの間、田山白雲がこの部屋へはいり込んで、計らずこの壁書を逐一讀み破つてアツと感して舌をまきました。

料理書の標題には「隨園食箴」とあるが、白雲は餘程、この料理書の張り出しには驚異を感じたと見えて、お手のものゝ繪筆で、そのある部分に朱を加へたり、評語を書きつけたりしたのが、今でもそのまゝに残つてゐる。その壁書の下で仕事をしてゐた金椎は、暫くして卓にもたれてゐねむりが熟睡に落ちたところでもあります。

眠るつもりでこゝへ來たのでない事は、金椎の眼の前に讀みさしの書物が伏せてある事でもわかるが、まだ晚餐までには時間もあるし、主人の外出といふやうな事で幾分は氣もゆるんだと見え、つうと／＼と假睡に落ちたものでありませう、本來、少年の事だから、眠れば假睡から熟睡に落つるには他愛がない。

金椎が假睡から熟睡に落ちてゐる間、この部屋へ一人の闖入者が現れました。

これは最初からの闖入者ではない、闖入する以前に戸もたゞいて見たし、何だかわからない言葉

もかけて見たのですが、何分の手答へがないためにこらへきれずして、最初は、極めて臆病に戸を押して見たが、遂には可なり大膽な態度で、戸を押し開き、家の中へ入つて來ました。

それでも、計畫ある闖入者でない證據には、まだオド／＼として、何か案内の許しを乞ふやうな言葉があつたのですが、誰もそれに挨拶を與へるものが無いので、思ひきつて床の板に踏み上りました。

これはまた是非もないといへば是非もない事で、つんぼであつた金椎の耳には、たゞでさへ、僅の案内では耳にうつらうはずもないのを、この時は前にいふ通り假睡から熟睡へ落ちた酣の時分でしたから、最初のおとなひも、あとの闖入も一向注意を呼び起さうはずはなく、一步一步に居直る闖入者の大膽なる態度を如何ともすることが出来ません。

この闖入者は部屋の一角に眠れる金椎のあることを發見して、一時はギョツとしたやうでしたが、やがてニツと物すごい笑ひ方をして一層足音を忍び、兎に角その部屋の中をしげ／＼と見廻しました。

さうして餘物には眼もくれず、釜や鍋やどんぶりやお鉢や皿や重箱の類、あらゆる食器といふ食器の蓋を取つて見たり、のぞいて見たりしたが、やがて一方の食卓の前に腰をおろすと、そこらにありとあらゆる食物を掻き集め、皿にもり上げ、さじを取つて食ひはじめました。

この際この闖入者の風貌を窺と見ると眼が碧で、ひげの赤い異國人でありました。田山白雲より

も一層肥大な形に、ボロ／＼になつた古服とツボンをつけたマドロス風の異國人であります、どこの國の異國人だか、それは一向にわからないが、西洋種であり、マドロス風であり、乞食じみてゐることは一見争ふべからざるのみならず、ガツ／＼飢ゑきつてゐて、多分、一飯の恵みにあづからうとしてこゝへ来て、ツイ出来心で、食物にカヂリついた者であることは、その舉動でもわかる。要するに、闖入者ではあるが強盗ではない、乞食を目的として来たものだらうが乞食を職業としてゐるものもあるまい。

流れ／＼て来た流浪人としても、陸上からは、こんなのが流れて来るはずがない、太平洋の上を一人で流れて来る筈もない。かういふ姿をこの際見るのは降つて湧いたやうなものだが、何事の詮索よりも急なのは飢ゑである。かれはガブリ／＼とあらゆる食物を手當り次第に食つてゐる、たゞ食ふのではない、アガキ食ひ、ふるへついで食つてゐる。

單にこの部屋にありとあらゆる食物といつてしまへばそれだけのものだが、その材料は金椎としては可なりに苦心して集めたもので、またすべて苦心して調味を終へたものもあり、苦心してたくはへて置いた調味料もある。

それをこの闖入者は無残にも、固形のものも悉く食ひ、液體のものも悉く飲むだけしかの饜當は知らないらしい。それを片づけしから取つて胃の腑に送りこむだけの事しか知らないらしい。

今日は、あれとこれを調合し、主客の味覺を一々参考とし、明日に持ち越さないだけの配分を見

つもり、その秩序整然たる晚餐の準備が、眠れる眼の前で、無残にも蹂躪され顛覆されてゐる。それを全然知らない金椎も又悲惨であるが、飢ゑのためにこの料理王國のあらゆる秩序を顛覆し顛覆せねばならぬ運命に置かれた闖入者の身も又悲惨といはねばならぬ。

その壁間にかゝるところ、支那料理法の憲法なる「隨園食單」には何と書いてある。試みに田山白雲が圈點を付してあるところだけを讀んで假名交り文に改めて見てもかうである。

凡ソ物ニ先天アル事、人ニ資稟アルガ如シ。人ノ性下愚ナル者ハ、孔孟之ヲ教フト雖モ無益也。物ノ性良シカラズバ易牙之ヲ烹ルト雖モ無味也……

又曰く

大抵一席ノ佳味ハ司厨ノ功其六ニ居リ、買辦ノ功其四ニ居ル……

又曰く

厨者ノ作料ハ婦人ノ衣服首飾ナリ。天姿アリ塗抹ヲ善クスト雖モ而カモ敝衣縵縷ナラバ西子モ亦以テ容ヲ爲シ難シ

又曰く

醬ニ清濃ノ分アリ、油ニ壹素ノ別アリ、酒ニ酸甜ノ異アリ、醋ニ陳新ノ殊アリ、糸毫モ錯誤スベカラズ

又曰く

調劑ノ法ハ物ヲ相シテ而シテ施ス……

又曰く

諺に曰ク女ヲ相シテ夫ニ配スト記ニ曰ク人ハ必ず其倫ニ擬スト烹調ノ法何ゾ以テ異ナラン、凡ソ一物ヲ烹成セバ必ず輔佐ヲ需ム……

又曰く

味太ダ濃重ナル者ハ只宜シク獨用スベシ、搭配スベカラズ……

又曰く

色ノ艶ナルヲ求メ糖ヲ用ユルハ可ナリ、香ノ高キヲ求メテ香料ヲ用ユルハ不可ナリ……

又曰く

一物ハ一物ノ味アリ、混ズベカラズシテ而シテ之ヲ同ジウスルハ、ナホ聖人、教ヘヲ設クルニ才ニヨツテ育ヲ樂ミ、一律ニ拘ラズ所謂君子成人ノ美ナリ……

又曰く

ヨク榮ヲ治スル者ハ須ク……一物ヲシテ各一性ヲ獻ジ、一椀ヲシテ各一味ヲ成サシム……

又曰く

古語ニ曰ク、美食ハ美器ニ如カズト……

又曰く

良厨ハ多ク刀ヲ磨シ、多ク布ヲ換ヘ、多ク板ヲ削リ、多ク手ヲ洗ヒ、然ル後菜ヲ治ス……

「隨園食單」と「戒單」とは支那料理法の論語であり憲法であります。

今や、その論語と憲法の明章たる下で蹂躪と破壊とが行はれてゐる。見給へ、この闖入者は薄と厚とを知らない、醬と油とをわきまへない、清と濃との分も、葷と素との別も頓著しない——凡そ口腹を満たし得るものは皆引つかき廻して口に送る、料理王國の權威は地に委して、すさまじい混亂がつむじのやうな勢ひで行はれてゐる。

この闖入者にとつては、やむを得ざる生の衝動かも知れないが、料理王國の上からいへば、許すべからざる亂賊であります。

革命は飢ゑから起ることもあるが飢ゑが、必ず革命を起すとは限らない。飢ゑが革命まで行くには時代の壓迫といふ不可抗力と、煽動屋といふブローカーの手を經る必要があるやうに思ふ。だから、こゝで行はれてゐるのは、實はまだ革命といふには甚だ距離のあるもので、モツプといふにも足りない。ほんの些細の内しよ事に過ぎないでせう。何となれば、革命のした仕事は取り返しがつかないが、モツプの仕事は、あとで相當に整理も出来るし、回復も出来る筈であります。殊に、飢ゑが室内で行はれ、また室内で回復されてゐる間は、ほとんど絶對的といつてよいほど安全で、どう間違つてもその室内者の胃の腑を充たす惱みだけの時間であるが、これに反して飢ゑが室内から街頭へ出た時はあぶない。

例へば、ありとあらゆる飲食物を減茶苦茶に掻きまぜて見たところで、それを悉く食ひ盡して見たところで、後で多少料理番を狼狽させるだけのことで、取り返しのつかない缺陷といふものは残らない筈であります。闖入者がいかにこの場で蹂躪をほしきまゝにしても、それは結局この金椎の平和なる假睡をさへ破ることなくして終るのだからツミはない。

果して、幾ばくもなく、胃の腑を充分に満足させた闖入者は、げんなりとして、人のよい顔をし、充ち満ちた腹をゆすぶつて、四方の隅々までデロリ／＼と見廻しました。

本當に人のよい顔です、十九年ツローンの牢にゐた罪人は、こんなおめでたい顔をしてはゐなかつた。食に充ち満ちた闖入者は爐にあつた鐵瓶を取つて、その生ぬるい湯をガブ／＼と飲む。

そこで、またも念入りに金椎の寝顔を見てニツコリと笑つたが、これとても、好々たる好人物の表情で、この時、

「お前、何をしてゐるの、食べてしまつたらサツサと膳をお洗ひ……ほんとにウスノロだね」
とおかみさんにでも怒鳴られやうものなら一も二もなく、

「はい／＼」

と恐れ入つて、流し元へお膳を洗ひに行く宿六の顔にこんながある。

併し、金椎はまだ眼がさめない。そこで、人のよい闖入者はいよく、いゝ氣持になつて、深々と椅子に腰をおろして遂に懷中からマドロスパイプを取り出してしまひました。

パイプに、きざみをつめて、爐の中の火をかき起さうとした時に、闖入者は、ハタと膝を打ちました。膝を打つた時は、無論パイプは食卓の上に乗せてあつたので、彼はこゝで、食後の一ぷくをやる以前に忘れきつてゐた重大な一事を思ひ出したかに見ゆる。

そこで、パイプも火箸もさし置いて、かれは立ち上がり、よろめいて、さうして戸棚のところへ行つて、その戸棚を慎重にあけて、さうして、以前よりは一層人のよささうな顔をズツと戸棚の中につき込み、あれかこれかと戸棚の中を物色したものです。

繰返していふ通り、これは盗みを目的として來たのではない、眼前口頭の飢ゑが満たされさへすれば、暗いところをのぞいて見る必要は更になかるべき筈だが、かく戸棚の隅々を調べにかゝつたのは、衣食足つて禮節を知るといふ段取りかも知れない。果してこの闖入者は、その禮節を戸棚の隅から探し出して來た。

「これ／＼」

どうして、今までこゝんところに氣がつかなかつたらうといふ表情で、戸棚の隅から抱へ出したのはキュラソーの一瓶でありました。闖入者はこのキュラソーの一瓶を戸棚の中から、かつぎ出すと、丸つきり相好をくづしてしまつて、至祝珍重の體であります。

實は、もつと以前に、この禮節をわきまへてをらなければならぬ筈だが、飢ゑが禮節を忘れしめるほどに深刻であつたのを、こゝに至つて満腹がまた禮節を思ひ出させたと見える。

満腹の闖入者は、今しこのキュラソーの一瓶を傾けながら、上機嫌になつて、ダンス氣取りの足ドリで早くもこの料理場をすべり出してしまひました。

飢ゑは室外から街頭に出してはならないが、満腹はどこへ出してもさまで害をなさない。たゞキュラソーが人をキュリオス(好奇)に導くのがあぶないといへばあぶない。

闖入者は、満腹に加ふるに陶醉を以てしてこの料理場からすべり出したが、そこは街頭でもなければヴェルサイユへ行く道でもない。次の室から次の室へと導かるゝまでであります。

その次の室といふのがこの頃一室を建て増した食堂兼客室であり、それを廊下によつて二つに分かれて行く、とその一方が駒井甚三郎の研究室と寢室、他の一方には——若干の客が逗留してゐる。

ウスノロな闖入者は、可なり廣い食堂兼客室へ來ると、そのあたりの光景が急に廣くなつたのと、その室が有する異國情調——實は自國情調ともいつたものに刺戟されたのか、いよ／＼い／＼氣持になつて、片手にキュラソーの瓶をかざしながら、足踏み面白くダンスをはじめました。

この一室で、ウスノロの闖入者は可なり面白く踊つたが、いつまで踊つても相手が出て來ないのが不足らしく、もう一つその室を向うにすべり出さうとしました。

このウスノロは、それでもまだ、自省心と外聞との全部を失つてゐない證據には、ダンスの足踏みもさう甚だしい音を立てず、羽目をはづした聲で歌ひ出さないのでもわかるが、本來、音を立

てゝ人前で踊れないほどに舞踏も物にはなつてゐないのだから、聲を出して歌ふほどに歌らしいものを心得てはゐないのだらう。併し、いゝ心持はいゝ心持であつて、このいゝ心持を一人だけで占有するには忍びないほどの心持にはなつてゐるらしい。

そこで、かれはいゝ加減この食堂で踊りぬいてから次へ……廊下を渡つて一方は主人の室——一方は客の詰處の消分道にかゝり、そこで、ちよつと途惑ひをしたやうです。

途惑ひをした睡眠には、あゝ、これは少し深入りをし過ぎたなどの自省もひらめいたやうでしたが、そこはキュラソーの勢ひが一層キュリオシチーのあと押しをして、忽ち左に道をえらび、とろ／＼主人の研究室と寢室の方へと無二無三に闖入してしまひました。

それにしても無用心なことです。駒井のこの住居には、この頃著しく客がふえてゐる筈なのに——金椎一人を眠らせて置いてみんなどこへ行つたのだらう、少くとも、岡山白雲が來てゐる以上には、清澄の茂太郎もゐなければならぬ。茂太郎がある以上は、岡本兵部の娘もゐるかも知れない——その他それに準じて館山の方からも、造船所方面からも相當に人の出入があるべき筈。それを今日に限つて、この異國のマドロス風の漂流人らしいウスノロ氏の闖入に任かせて、守護不入の研究室にまでも荒させやうといふのは餘りといへば無用心に過ぎる。

併し、實はこの無用心が當然で、こんな種類の闖入者があらうといふ事は想像だも及ばないこの地の住居の事だから、それは無用心を咎める方が無理だらう。

また併し、こゝは、料理場と違つて、駒井甚三郎の研究しかけた事項には、斷じて掻き廻させてはならない事があるに相違ない、こゝで革命を行はれた日には料理場の類ではなく、確に取り返しつかない事があるに相違ない、さればこそ駒井甚三郎は、いかなる親近故舊といへども、この室へは入場を謝絶してある筈。

幸な事に、この室には錠が卸してありましたから、闖入者も如何ともし難く、立ちつくして苦笑ひを試みました。

研究室の扉が明かなかつたものだから、闖入者はにが笑ひして暫く立つてゐたが、また泳ぎ出して次なる寢室に當つて見ると、これが難なく開いたのが不幸でありました。

研究室の扉の頑強なるに似ず、ほとんどこれは手答へなしにフワリと開いたものですから、闖入者は押し込まれるやうにこの室に闖入してしまひました。

闖入して見ると闖入者が、

「あつ！」

と、キュラソーの瓶を取り落さうとして、やつと食ひとめながら眼を丸くして室の一方を見つめます。

寢臺の上に半分ばかり毛布をかけて、一人の若い女が寝てゐました。

よく眠る家だとも思つたのでせう、前の少年は假睡であるが、これは兎に角、休むつもりで寝

臺の上にある——だが病人ではない、かうして日中も身を横たへてをらねばならぬほどの病人とは思へない、それほどにはやつれが見えない、あたり前の若い娘、殊になか／＼の美人である。それと、寢まきを著てゐるわけではないのだが、これは本式に寢臺に横たはつてゐるとはいへ、やはりうたゝ寢の種類に違ひない。さうして見ると、この國はよくうたゝ寢をする國である。毎日一定の時間には必ず一定の晝寝をするやうに定められてゐるのか知らんと、闖入者は疑つたのではあるまい。思ひがけないところに、思ひがけない異性を發見したものだから、その好奇心が極度に眩惑されてしまつたものと見える。

だが、好奇心といふものは、もとより事を好むものであります。事がなければそのまゝ消滅してしまふものですが、事がありさへすれば、いよく増長して、遂に罪惡の城まで行かなければとどまらないものであります。それを引きとどめるのに自制心がある。それを奨励するものにアルコールがある。

今や、このウスノロ氏には自制心が眼を閉ぢてアルコールが活躍してゐる時だからたまりません。

「エへへへ……」

と忽ち薄氣味の悪いを催しながら、徐にこの寢臺へ近づいて見ました。

この際、美しい女でなくとも、單に異性でありさへすれば、好奇心を誘惑するには十二分でありませんが、不幸にして、寢臺の上なる女は浮世繪の黄金時代に見る面影を備へた美しい女でありま

した。

多分、碧い眼で見ても美しい女は美しく見えるだらうと思ふ。

ウスノロ氏が、ニヤリ／＼と笑ひながら、いよ／＼近く寢臺に寄つて来るのを、軽いいびきを立
なてゝゝある當の主は一向さとらうとはしません。それに、この時はどういふものか金椎を驚かさ
いやうにあの室で食事をした以上の慎重さを以て、徐々と近づいて行き、やがて寢臺の欄のこ
ろへすれ／＼になるまで来ても、ぢつと娘の顔を見たまゝで、ほとんど手放して涎を流すやうな
有様で、島田に結つた髪が可なり亂れて、著物の襟はよくキチンと合つてゐたが、鬢の下へ折り
まげた二の腕が、ほとんどあらはになつて、併し、幸ひな事に、帯から下はズツと毛布が守つて
ゐるものですから、いはゞ半身の油繪を見せられるやうな女の姿に見とれてゐる。

そのまゝ、突つ立つてゐたウスノロ氏が、どうしたのか急に呼吸がハズんで来ると、その眼の色
まで變りかけて來ました。

碧い眼玉は別に變りやうがあるまいと思はれるのに、たしかに眼の色も變り、顔の色も變り、透
にはワナ／＼とふるへ出したものゝやうにも見える。

「茂ちゃん、いたづらしちゃいやよ」

その時、女がうわ言のやうにいひました。

「いやよ、いけないよ、茂ちゃん」

女は再びいつて、まだ眠りからさめないで手で顔の上を拂ひながら、

「いやだてば、茂ちゃん」

ウスノロ氏は指を出して娘の頬を二三度突ツつて見たものだから、

「茂ちゃん、いやだてばよ」

女は四たび目に、手で自分の頬先を拂つて漸く眼を開いて見て驚きました。

「あ！」

それは茂ちゃんではない、全く茂ちゃんとは似もつかない——似ないといつても、想像以上の、
髪の毛のモチヤ／＼な、眼の碧い、鼻の尖つた、ひげの赤い服の破れた大の男が、今しも自分を
上から壓迫するやうにのぞき込んで、棒のやうな指で自分の頬をつゝいてゐるのを見ると、

「いけない！」

娘はバツとはね起きると、大の男が口早やに何かいひました。

何かいつたけれども、それは娘にはわからない、恐怖心でわからないのではなく、いつた言葉を
のものゝ音がわからない。

「お前は誰だい、あつちへ行つてお出で、誰にことわつてこゝへ來たの、あつちへ行つてお出
で——」

娘は叱りながら扉の方をさして立退きを命ずるほどの勇氣がある。

そこで大の男がまたチイ／＼バアバアいふ。けれども、何の事だかそれが聞き取れない、また聞き取つてやる必要もない、他の寢室へ闖入して、異性に戯れんとするは狼藉中の狼藉である。容赦と辯解とを聞き入るべき餘地あるものではない。

「あつちへお出でなさいといつたらお出でなさい——人を呼びますよ、誰か来て下さい！」

娘は遂に可なり大きな聲を立てましたが、こゝまで闖入者を許すほどの家だから、この聲が有効になる筈はありますまい。

金椎があるにしても、あれは、よし眼がさめてゐたとて聲では驚されるものではない。娘にとつては可なり危急な場合ではあるが、萬事人間のすることはさう手つ取り早く行くものではない、猫ですらが鼠をとつた時は、一通りその功名を誇つてから後に食ひにかゝる。假りにこのウスノロ氏が思ひ設けぬ御馳走にありついたとしたところで、食の後には酒、酒の後には若い女と、かう順序があまりトン／＼拍子に運び過ぎて見ると、何だか自分ながら果報のほどに恐ろしくもなるだらう。

まして、これは最初から兇暴な野心を微塵も持つて來たのではない、かりそめの漂流者であつて見れば、さう咄嗟の間に兇暴性を充分働かせるだけの器量があるとも思へない。要するにウスノロ氏はウスノロ氏だけの事しか仕出かし得ないものだらうから、かういふ場合に處するには、まな處するだけの道があつたらうと思はれる。落著いてその道を講ずる餘裕を失つて、狼狽して事

を亂すと、却つて相手の兇暴性をそゝり、敵に乗ぜらるゝの結果を生むかも知れない。

恐怖がこの娘を狼狽させたか、狼狽からいよ／＼恐怖がわいて來たか、

「行つておしまひ、誰か来て下さい——」

二度大聲をあげると娘は腰から下にかけてゐた毛布をとつて、そのまゝ力を極めて大の男に投げつけたものですから、大の男がまた大あわてにあわてゝ、その毛布を取り除かうとして却つて深くかぶり、一時は非常に狼狽したが、やがてそれを取り拂ふと娘が、

「誰か来て下さい——」

四度び叫びを立てたものですから、大の男が堪まらなくなつて、その口をおさへました。口をおさへるには先づ右の腕をのばして、輕々と自分の胸のところまで引きつけて、そこで口をおさへると、娘が、兩足をジタバタとさせてもがきました。

かうなつた時に、ウスノロ氏にはじめて、本能的の兇暴性がグングンと芽をのばしたやうに、

「あれ誰か来て——」

その聲を今度は鬚面でおさへてしまひました。

大の男はそこで、娘の顔に向つて、メチャ／＼に接吻を浴びせかけやうとする。娘はさうはさせまいと争ひ且叫ぶ。

十七

併し、人生はさう無限に闖入者にのみ兇暴性をたくましくさせるの舞臺ではない。無用心ではあるが無人島ではないこの住居へ、いつまで人間らしい人間の影を見せないといふことはあるべき道理ではない。

駒井甚三郎が晝櫃をかゝへ、田山白雲がジャガタラいもを携へて悠々寛々と門内へ立ち戻つて来たのがその時刻でありました。

白雲は料理場へジャガタラいもをほり込んで、駒井の手から晝櫃を受け取つて、廊下の追分のところまで来た時分に、駒井の寢室がこの騒ぎです。

「誰か来て下さい——」

それと混亂して一種聞き慣れない野獸性を帯びた聲。

二人は、ハツと色めいて、宙を飛ぶが如くに例の寢室まで来て見ると、この有様ですから無二懸

三に、

「この野郎——」

腕自慢の田山白雲は、後から大の男を引ずり出して矢庭に拳をあげて二ツ三ツ食らはせましたか、それにも足りないで倒れてゐるのをのしかゝつて續けざまにこぶしの雨を降らせたものでした。

と同時に大の男が泣き叫んで哀れみを乞ふの體。それも言葉がわかれば多少の諒解も同情も出たかも知れないが、何をいふにもチイチイバアで、たゞ締めなく泣き叫ぶのを、田山白雲が、この毛唐！ふざけやがつてといふ氣になつて、少しの容捨もなく、いよ／＼強く續け打ちに打ちました。

よし、言葉がわからずとも、憎いやつであらうとも、體格が貧弱で、打つに打ち甲斐のないやうなやつでもあれば、白雲もいゝ加減にして打つのをやめたかも知れないが、何をいふにも體格は自分より遙に大きいから、打つにも打ち甲斐があると思つて、容捨なく打つたものでせう。

駒井甚三郎さへも、もうその位で許してやれといひたくなるほど打ちのめしてゐるうちに、どうしたものか、今まで哀訴囀の聲だつたウスノロの聲が、トはかに變じて怒號叫喚の聲と變りました。

それと同時に必死の力を極めてはね起きやうとするから田山白雲がまた勃然と怒りを發し、おさへつけてブンなぐる。

それをウスノロが必死になつてはね起きると、可なりの地力を持つてゐると見えて、とう／＼はね起きてしまひ、はね起きると共に力を極めて田山白雲を突き飛ばして逃げ出しました。

一旦、突き飛ばされた白雲は、こいつ、生意氣に味をやる——と齒がみをしながらウスノロのあとを追ひかける。

見てゐた駒井は、これは白雲が少しやり過ぎる、あいつもあのまゝでは打ち殺されると思つたから必死の力を揮つて逃げ出したのだらう、へたな事をして怪我でもさせてはつまらない——と心配はしたけれども、仲裁のすきがありませんものでしたから、是非なく、二人の先途を見とゞけやうとしてそのあとを追ひました。

本来、田山白雲はその風采を見て誰でも畫家だと信ずるものはないやうに、筋骨が尋常ならぬ上に、武術もなかくやり、殊に喧嘩けんかにかけては相手を嫌はぬしれ者でありましたから、かういふ場合に、ちつとしてをられる譯がない。

殊に一旦、取り押へたやつにはね起きられて、突き飛ばされて、逃げられたといふのがしやくにさはつたものらしい。

そこで廊下を追ひつめて来たところが、例の食堂で、こゝへ来ると、いつの間にか、料理場へ通ふ戸が締切られてあつたものだから、大の男が逃げ場を失ひました。

逃げ場がなくなつたものですから、絶體絶命ぜつたいぜつめいで大の男は、その戸じまりの前に立つて、何とも名状し難い妙な身構へをしました。

そこへ田山白雲が追ひかけて来て、その身構へを見てあきれ返りました。

これは窮鼠猫をかむといふ東洋の古い諺そつくりで、狼狽のあまりとはいへ、あの身構へのザマは何だと、白雲は冷笑しながら近づいて行つて、その首筋を取つて引き落さうとする途端を、ど

う間違つたのか、その名状し難い妙な身構へから、兩わきにかい込んだ拳が電火の如く飛び出して、白雲の首からあごにかけて、したゝかになぐりつけたものですから不意を食つた白雲がタチ／＼となるところをすかさず第二撃、さすがの白雲がそれに堪まらず、地響きを立てゝ床の上へ打ち倒されてしまひました。

起き上がった時の白雲は烈火れつゐの如く怒りました、だが、最初に馬鹿にしたあの變な身構への怖るべきことをこの時は氣がついたやうです。變な身構へが怖ろしいのではない、あの變な身振りから飛び出す拳の力が怖ろしいのだとさとりました。

だから、こいつ、何か術を心得てゐやがるなと感づいたのも、その時で、さう無茶には近寄れない、強引にはやれないと、氣がつきながら起き上がつて見ると、まだ逃げることも廻り込むゆとりもない大の男は、同じやうな變な身構へ——それをいつて見ると、身體の半分を屈して、眼を皿のやうにし、兩方の拳をわきの下へ持つて来て、そのこぶしをしかと握つたところは、たとへば、柳生流の柔術でいへば乳の上乳の下のの構へ、といふのに似て、組むためではなく突くためか打つためか、或は拂ふための構へだと見て取りました。

毛唐の社會には、こんな手があるのか知ら 併し、油断してタカをくゞつてゐたとはいひながら、あのこぶしの一撃でよろめかされ、二撃で完全に打ち倒されてしまつたのだから、白雲が、齒かみをするのも無理はない。

今で考へると、この大の男が取つてゐる身構へは拳闘をする時の身構へであつて、この男は相當に拳闘を心得てゐて、自分の危急のあまり、その手で白雲を打ち倒したものだから、決して無茶をやつたわけでもなく、力づくで振り飛ばしたわけでもない、先方はつまり習ひ覚えたる正當の格によつて應戦して來たのを、こちらが無茶に不用意に近づいたから不覺を取つたものに違ひない。前にもいふ通り田山白雲は畫家に似合はず屈辱な體格であり、兼ねて武術のたしなみがありなかくの骨力があつて、酒を飲んで興たけなはなる時は、神祇組でも白鶴組でも向ふに廻して喧嘩を辭せぬ勇氣があり、また喧嘩にかけては、ほとんど無敵——といふよりはその蠻勇を怖れて相手になり手がなまいといふほどに賣り込んでゐるから、自分もその方面にかけては十分の自信がある。

繪筆をにぎる人が、喧嘩を商賣にするのは、どうも釣合はない事のやうですが、本來、田山白雲は繪師たるべく繪師となつたのではない、慷慨の氣節もあり、縦横の奇才もないではないが、何をいふにも小藩の小祿の家に生れたものだから、その生活の足し前として繪畫を習ひ出したので、もとより好きな道でもあるが……この點は三州の渡邊華山にも似てゐる。

そこで白雲は喧嘩が本業だか繪が本業だかわからない事がある。どこへ行つても畫家とは見られないで、武者修行と見られる事の方が多い。

こゝにおいて白雲は勃然として怒り、この毛膚味なまねをやる、そんならば一つ、天眞神場流

奥の手を出して……と本氣になつてかゝりました。

第一に、あの拳を避けて取ツつかまへ、思ひきり投げ飛ばして、跡か逆かで、目に物を見せてくれやうといふ策戦を立てました。

この計策、見事に當つて大の男をズデンドウと投げ出したのは、目ざましいばかりです。

投げると共に飛び込んで行つた白雲は、無残に大の男の首をしめてしまひました。

「サア、どうだい」

返答のないのも道理。大の男は一たまりもなく完全に落されてゐました。

入口に立つて見てゐた駒井甚三郎は、田山白雲の武勇の程に驚いてしまひ、投げたならば抑へ込みか逆かで相當に苦しめて許してやるのだと思つてゐたところが、グン／＼しめてしまつたものだから、これは過ぎる——いくら何でもやり過ぎるわいと、又しても白雲の暴力に怖れをなした様子で、

「大丈夫ですか？」

と念を押しますと、

「大丈夫です、抛つて置けば生き返りますよ」

白雲は一息入れる。

それと同時に、氣にかゝる事があつて、食堂と料理場の間の戸、つまり大の男が進退きはまつた

戸口をあけて見ると、可哀想に、そこで金椎が泣き出しさうな顔色をして、料理場の中を右往左往に狼狽してゐます。

さうでせう。自分が一睡の間に、自分の王国は、すっかり荒されて、丹精して晩餐に供へやうとした材料はすべて食ひつくされてゐるのだから、さうして、これから迫つた時間の間に、その復興をしなければならぬ。

その復興は出来るとしても、誰がいつの間に来て、こんな手きびしく亂暴を働いて行つたのか、皆目わからない、いたづらをするとなれば、これは清澄の茂太郎にきまつてゐるが、これは茂太郎のいたづらとしては規模が大き過ぎてゐる。ことほどに、自分の持場を荒されて、全然それと気がつかなくつたといふことは、損害の問題ではなく、自分の職務の責任の問題だといふ顔をして、それでも差當りの急は悔いてゐるよりは働かなければならぬ。取り敢えず差迫つた晩餐の復興を根本的にやり直すことに全力を注がなければならぬといふ氣持で、悲痛と憂愁の色をたゞへながら、料理場の中を頻に奔走してゐるのです。

金椎の耳には、たゞ今この隣室で行はれた大活劇もはいらなかつたものと見える。

そこへ、田山白雲が顔を出したものですから、金椎は申し譯のないやうな顔をする。

たゞ今、泥濘がはいつてこの通りでございますと、訴へれば訴へられるのをこの少年は、無言でたゞ、申し譯のない顔だけをして一心に俯いてゐる。

「金椎君、何かやられたかい、こいつに……？」

白雲は斯ういつて見たけれど、金椎の耳にはそれが用をなさないと氣がついて、例の料理法の意法の下へ、有合せの筆を取つて、

「洋夷侵入、白雲萬里」

と書きました。洋夷侵入はわかつてゐるが白雲萬里が何の意味だかわからない。

駒井甚三郎も、この時、室内に入り來つて被害の實況をよく調査する。

結局、たゞ食ひ荒し飲み荒し、たゞけで、他には何等の盜難もないといふ事。たゞ、秘藏しつげなしで、誰も手をつけなかつたキュラソーが、一瓶なくなつてゐるが、これとても闖入者が私したのではない——私したのはわかつてゐるが、それを持ち出してどうのかうのといふのではなくたゞ飲んでしまつていゝ心持になつたのだといふことがわかり、つまり、あいつは、たゞ食に、迫つてこの家へ闖入し、飢ゑが満たされてからあちらへ戸惑ひをして行つたものに過ぎまいといふ想像が話題になつて見ると、白雲も、あまり手きびしくとつちめたのがむしろ可哀想にもなりました。併し毛唐は毛唐に違ひない、あんな奴がどうして一人だけこんなところへ流れ込んだのだらうといふ疑問は誰の胸にも浮ぶ。

その時隣室でうーんとうなり出したのは、問題の男が息を吹き返したものでせう。

十八

晚餐の食堂の開かれやうとする前、駒井甚三郎と田山白雲と、例のマドロス氏とが卓を圍んで會話をはじめました。

ところが、まどろこしい事には、駒井の英語は耳も口も目ほどには行かないものですから、マドロス氏との會話に非常に骨が折れるのに、またマドロス氏の言葉が英語が土臺にはなつてゐるが、なまりが非常に多いと來てゐるから、斷線したり、わからないなりでしまつたり、要領を得たやうな得ないやうな頗る珍妙な會話でありましたが、併し、この骨の折れる珍妙な、會話が、駒井と白雲とを興に導くことは非常なものでした。

兎に角、そのしどろもどろな會話を綜合して見ると、このマドロス氏はオランダで生れて英國で育ち、マドロスとして、ほとんど沿海の諸國を渡り歩いてゐるうちに、その言語が英語を主として、それ等諸國の異分子が、ゴツチャになつてゐるうち、支那の上海あたりにゐた事も可なり長かつたとやらで、支那語もちよいく入ります。

駒井の方は不自由とはいひながら、兎も角正確な文法から出てゐるのだが、マドロスの方はペラペラです。

どうしてこんなところへ流れついたかといふ疑問に答へたところを、つゞり合せて見ると、例で

も日本の北海へ密獵に來て、その歸りがけにこの近海へ碇泊してゐるうち、勝負事で仲間にいぢめられるかどうかして、船を逃げ出し、その逃げ出す時に萬一の用意として、ポテトを一袋持つて海へ飛び込んで泳いで見たが、ポテトが邪魔になつて思ふやうに泳げない、そこで是非なくポテトを打ち捨て、泳いだら、間もなく海岸へ泳ぎついた。こんな事ならポテトを捨てるではなかつた——今更ポテトが惜しくてたまらない。あのポテトさへあれば、當座の飢ゑをしのごことが出來たのだ、當座の飢ゑをしのでさへれば、かうして人様の家へ闖入して、首をしめられ、地獄の境まで見せてもらふやうな羽目にも落ちなかつたらうに、返すくもポテトに恨みがあるやうな事をいひました。

その愚痴が可笑しいといつて、聞きながら駒井甚三郎が笑ひ出すと、田山白雲は何の事だかわからないが、マドロス氏が頬に手まねをしながら、ポテト、ポテトといふ語を繰返すものだから、白雲が横の方から口を出して、

「ポテトといふのは何ですか？」

「それは例のジャガタラいもの事だよ」

「は、あ、あのジャガタラか……」

白雲が成程とうなづくところを、駒井が翻譯して、この男が仲間からいぢめられて船を逃げ出す時に、ジャガタラいものを一袋持つて海へ飛び込んだが、ジャガタラいものが荷になつて思ふやうに

泳げない、そこでやむなくジャガタラいもを打ち捨て、泳いだら、捨て、間もなく岸であつた、こんな事ならジャガタラいもを捨てるではなかつた、今更ジャガタラいもが惜しい、あのジャガタラいもさへあらば、飢ゑに迫つてこんな浮き目を見なくても済んだに……と今この男がジャガタラいもに向つてかす／＼の恨みを述べてゐるところだ……駒井が白雲に話して聞かせると、白雲が、はじめて大口開いてカラ／＼と笑ひました。

「は、あ、いにも恨みが数々ござるといふわけか」

間もなく、そのジャガタラいもが金椎の骨折で巧にゆであげられ、ホヤ／＼と煙を立て、食卓の上に運ばれたところから、マドロス氏は妙な顔をして、そのジャガタラいもを一心にながめやる。田山白雲は腹をか／＼へて哄然として笑ひ、

「さあ、君、遠慮なくやり給へ、思はぬところでわが子にめぐり合つてうれしからう」

白雲が先づその最も大きなジャガタラいもを取つて皮をむき、鹽をつけて食ひはじめました。

そこで三人は、ジャガタラいもを食ひながら、その不自由な、間違ひだらけの會話を熱心に續ける。

田山白雲の武勇の事になると、駒井は全く舌をまき、マドロス氏は恐れ入つて、自分で自分の咽喉をしめるまねをして苦笑ひをする。その時に白雲が可なり眞面目になつて、しかも儼然とした調子で次の如くいひました。

「時にとつて腕力も必要ですよ、腐れ儒者は腕力は即ち暴力といひたがるけれど、人間が悉く聖人でない限り、腕力でなければ度し難いことがあるです」

「美術家たる貴君から腕力の讚美を聞かうとは意外です、いはんや、その實力を示されやうとは……」

「拙者はこれが持前ですよ、尤も近頃は少しおとなくなりました、併し、理由なき腕力を用いるといふことは斷じて致しませんから御安心下さい、理由ある場合と、事の急なる場合には筆の先や舌の力では緩慢で堪へきれませんからな」

「併し、腕力は結局また腕力を生むことになりはしないか？」

「正義にはかなひませんよ、正義を遂行するための腕力で、本當の腕力は正義の存する事の外には、さう強く揮へるものぢやありません、陰險卑劣なオツチヨチヨイ、つまり陰へまはつては人を陥弊しやうとするやうな奴、表へ出てはつかみどころのないやうな奴を制裁するのは腕力に限ります、大地の上へウンと一つ投げつけてやるか、腕の一本も打ち折つてやると、少しは眼がさめます、早い話が、われ／＼社會の偽物共を退治するなんぞには、これが一番近道ですよ」

「偽物退治とは？」

「つまり、繪の偽作をする奴なんです、名家の繪を偽作して盛んに賣り込んで儲ける奴があるんですな、泥棒よりもモットたちのよくない奴なんです、こいつがわれ／＼社會の裏面に蠅のや

うに寄生して始末に行かない事がある、なあに神品は模造すべからざるものだから、見る人が見れば問題にはならないが、世間はめくら千人だから、その偽物に欺かれるものが意外に多いです、さういふ蠅のやうな偽物共を一々取ツつかまへて、町奉行へ訴へ出るなんぞは煩はしくてたまらないから、大家達は知つて相手にしない事があると、そいつ等がいゝ氣になつて増長するものだから、畫界の風義を非常に亂す、そこで、拙者に三四人の腕きゝを集め、自分が先發で一々その偽物共をブンなぐつて廻つた事がありました。

「それは、なか／＼痛快ですが、暴力沙汰であべこべに告訴を受けるやうな事はありませんでしたか？」

「ありませんとも、暴力ぢやありません、正当防衛ですもの、盗みをする奴をつかまへて聞かぬけりや打ち殺したつて苦しかありませんよ、いはんやブンなぐる位は何でもない事です、五六人ブンなぐつたら、それで少しは利目がありました、中には腕を折られてヒイ／＼泣いた奴もありましたよ、あゝいふ蠅共を退治するには腕力に限るです」

美術界の神聖のために、その風儀の維持のために偽作者に腕力制裁を加へることの正義なる所以を白雲は力説しました。さうして自分がこの偽作者共のブラツクリストをこしらへて置いて片つぱしからヤツつけた經驗談を語り出でて、さうして今時の腐れ儒者や宵二才が、腕力即ち暴力とけなして自分の卑怯な立場を擁護しやうとする風潮をあざけりました。

十九

こゝで三人の會話に花が咲いてゐる時、海に面した他の一方の座敷で、美婦と妖童とがしめやかに問答をする。

岡本兵部の娘は疊の上に置かれた椅子に腰をかけて、すらりとした足を投げ出しながら絲巻に練をまいてゐると、それと相向つたところに清澄の茂太郎は、ちよこなんと座つて両手に練の束をかけ、膝の上には片時も放さぬ般若の面がある。

兵部の娘に練をまかせながら清澄の茂太郎は、

可愛由松誰と寝た

誰と寝た

お父さんと寝たなら

よし／＼

小音でうたふと、岡本兵部の娘はそれに合はせるやう

寝たといな

寝たといな

裾に清十郎と

寝たといふ

さういひながら手を休めず糸をまいてみるところを見れば少しも變つたところはない、言葉の調子だつて、その通り、茂太郎に對して親切な無様あねさまぶりといつたやうな氣位が少しも亂れてはをりません。

これはどうしたのだらう。駒井の手もとへ置いてもらふやうになつて、その精神がすっかり落ちついて、斯うも、たしなみのよいお嬢様の昔に返つたのか、それとも逢ひたがつてゐた清澄の茂太郎が來たので、その喜びから亂れた心が一時に納まつたのか、兎に角、岡本兵部の娘の今の有様は、精神にも肉體にも何等の異状を認めることが出來ず、このまゝこの家庭の一員として誰が見ても調子よく納まつてゐるのは、以前を知つてゐる者の眼から見れば不思議といふばかりです。不思議なのはそればかりではない、以前を知つたものに取つては、幾多の痛々しいものを知つてゐるでせう。知つて云はずして過ぐる人の眼には、複雑くわんざんな嘲笑の色を含んではゐるが、當人は淋しく取り澄ましてそれをやり過ごす、それが痛々しいとも見られるし、食へないとも見られる。どちらでも取りやうです。

糸を卷かせながら茂太郎は何か物足りないやうな風情で、

「殿様、殿様といふけれど、どうしてあの人は殿様なんだらう？」

「どうして殿様だつて、あの方は殿様なんだもの。」

「だつて殿様といふものは、槍を立てゝお供を澤山連れて、乗り物に乗つて、前觸れをしてお通りになるんぢやないか、家の殿様はお供もなければ、槍もないし、乗り物もない。」

「ホホホホ」

それを聞いて岡本兵部の娘は笑ひ、

「それはお前昔の事よ、うちの殿様も以前はその通りなんでせう、御大名でこそなかつたけれども立派なお殿様よ」

「今は？」

「今は浪人してゐらつしやるから……」

「どうして浪人したの？」

「どうしてだか知らないわ」

そこで絲卷の糸がこんがらかつたのを兵部の娘が軽くさばく。

「お嬢さん、お前今日も殿様のお部屋へ行きましたね」

「え」

「何をしてゐたの？」

「寝んでゐたのよ」

「一人で……？」

「無論の事さ」

「叱られるだらう？」

「だつて、あそこは静かでないや、……」

「騒がしいところはイヤ」

「え」

「では、どうして胡琴をひいたり、あたしに歌をうたはせたりするの？」

「その時はその時でね」

「ふだんは静かなところがいいの？」

「ええ。……だから殿様のゐない時にばかりあのお部屋へ行つて寝るの」

「やう」

茂太郎はまだ心元ない顔をしながら、その問答のいくさは兎も角、それで一段落になると、

た、

可愛由松誰と寝た

誰と寝た

お父さんと寝たなら

よし／＼

一つことを歌ひ出すと、二度三度口をついて出るのがこの少年の癖であります。その歌は例によつて出たら目ではあるが、それはいつ何の時、どこかで一度は鼓膜に觸れたことのあるものが、順序不同に口をついて出るのだから、あながち創作ともいへますまい。そこで一度、巻かせた糸の一たばが終りになりました。

「どうも御苦勞様」

「お嬢さん、殿様が浪人をするのは、何か悪い事をしたんだらう？」

「忌だ、悪い事なんかする殿様ぢやありませんよ」

「だつて悪い事をしなければ浪人する筈がないぢやないか？」

「さうとばかりは云はれなくつてよ」

「それでも、立派に殿様であられる人が浪人をするのは、つまり何か悪い事をして免職になつたんぢやない？」

「そんな事があるのですか」

兵部の娘は無意識に駒井の辯護をして來たが、思ふやうに茂太郎の耳には響かないと見えて、

「いゝ人だつてお前……いゝ人だつて悪い事をすることもありませんさあね」

茂太郎から先手を打たれて、兵部の娘はちよつと二の句が繼げなくなりました。

成程、さういはれて見ればそこに疑ひの餘地がないではない。ドコといつて非點の打ちやうのな

い殿様が、その位地を去らねばならぬまでの事情を聞いても見なかつたし、考へても見なかつたが、茂太郎からかりそめに疑はれて、はじめに疑ひの心で起りました。だが、この疑ひも自分の弱身を疑はれでもしたかのやうに、何か辯護の口實を發見しようと思つた揚句、

「それでもお前……天神様をござらん」

「え？」

「天神様をござらんさないな、菅原道真公を、天神様はあの通りのいゝお方でせう、それでさへ筑紫へ流されたぢやありませんか、時平公の讒言で……」

「……」

「讒言に逢つちや、誰だつて、どんなにエライ人だつてたまりませんよ」

かの女は漸く菅原道真においてその最も有力な辯護者を見出したかのやうに、一も二も讒言といふことに持つて行つてしまひたがる。

「さうかも知れない」

茂太郎が、それでやゝ納得の色があるのに力を得て、

「うちの殿様も、つまり讒言に逢つて今のやうに浪人してゐらつしやるのよ、だから、わたし本當にお氣の毒だと思ふわ」

「それでお嬢さん、お前はこゝのうちの何なの……？」

「わたし？」

「殿様のところへお嫁に來たんぢやないでせう？」

「イヤな茂ちゃん」

「それぢやお妾さん……？」

「茂ちゃん」

「何？」

「お前、どうしてそんな事を聞きたがるの？、お前らしくもない」

「だつて、お前は、こゝのうちへ何しに來てゐるんだかわからないんだもの、もと殿様のお家と親類なの？」

「そんな事は、どうでもいゝから、茂ちゃんお歌ひなさいな」

といつて兵部の娘は絲卷を置いて胡琴を取り上げました。

歌へといはれたが歌はない茂太郎は、

「お嬢さん、辨信さんの事を悪くいふのをおよし」

と急に思ひ出していふ。

「どうして？」

「どうしてだつて、お信さんは悪くいふ人ぢやない、あの人を悪くいふ方が間違つてゐる」
 「わたしは、そんな人一向知らない」

兵部の娘は三下りの調子で胡琴を鳴らして見ました。

「お雪ちゃんもいゝ子だ」

お雪ちゃんてどこの子？」

「上野原のお寺の娘よ」

「茂ちゃん、お前は、その娘さんにも可愛がられたらう？」

「可愛がられたさ」

「わたしと、どつちがいゝ？」

「どつちも大すぎ……けれども、お雪ちゃんの方がお嬢さんより親切ね」

「親切、どんなに親切？」

「どんなに親切つたつて、それは口にはいへないけれど、お雪ちゃんて人は本當に親切な人よ、わたしがゐないでも。わたしの事を心配してゐてくれるのよ」

「お雪ちゃんより、わたしの方がこわい？」

「こわかないけれど——」

茂太郎は、この時、立ち上がつて般若の面を取つてかぶりしました。

「茂ちゃん、もう少しお話しよ」

その時は、もう茂太郎の姿はこの座敷の中には見えず……といつても七兵衛のやうに忍術まがひの早業で消えてなくなつたわけではなく、窓から身ををどらして室外へ飛び出してしまつたのです。

程なく洲崎鼻の盡頭 東より西に走り來れる山骨が海に没して巖角の突兀たるところ、枝ぶり面

白く海へ向つてのした松の大木の枝の上に、例の般若の面をかぶつて腰打ちかけ、足を海上にプ

ラ下げた清澄の茂郎、北の方目近に大武の岬をながめ、前面三浦三崎と對し、内灣と外灣との暮

れ行く姿を等分にながめながら、有らん限りの聲を出して歌ひました。

萬木おふくが通るげて

五百雪駄の音がする

チーカロンドン ツァン

正木千石

那古九石

那古の山から鬼が出て

鯉の刺し身で飲みたがる

チーカロンドン ツァン

このところより、遠見の番所はさまで遠いところではない、あの座敷にゐた岡本兵部の娘の耳には明らかにこの歌の音が聞き取れる、歌の音が聞えるばかりではない、ちよつと身をかよめさへすれば今出て行つた窓のところから、明らかにこの龍燈の松と、その枝の上に身を置いて、海洋の上に高く足をブラ下げながら對岸三浦三崎のあたりを眼通りにながめてあらん限りの聲をしげつてうたふその人の姿を、まるで手に取るやうにながめる事が出来るのであります。

辨信さん

お前は知らない

あたしが

どこにあるか

お前には

わからないだらう

海は廣く

山は遠い

向うにぼんやりと

山と山の上に

かすんで見えるのは

富士の山

甲州の上野原でも

あの塔の上では

富士の山が

見えたのに

辨信さん

お前の姿が見えない

清澄の茂太郎はかういつて歌ひました。いや、これは歌ではない、單純明鏡に山に向つて呼びかけた言葉に過ぎないけれど、茂太郎が叫ぶと韻文のやうに聞える。

清澄の茂太郎は今、般若の面を小脇にかいこんで、砂濱の間を、まつしぐらに走り出しました。その時分丁度、西の空は盛んに焼けて赤くなり、ところによつては海の水さへが、紅を流したやうになりました。夕焼けのために空が赤くなり、従つて海が赤くなるのは敢て珍しいことではないが、けふに限つて、その赤い色が違ふやうです。老漁師はこんな變つた色を好みません。その色ざしによつて何とか明日の天候を見定める者ですが、この夕べは、十里の砂濱に日和を見やうとする一つの漁師の影さへ見えません。ところどころに龍安石りやんせきを置いたやうな岩が點出しているだけで、平沙渺漠人煙を絶するやうな中を、清澄の茂太郎は西に向つてまつしぐらに走り出し

ました。

六四六

眞つ直に行けば忽ち海に没入する道も、まがれば無限である。茂太郎は、その無限の海岸線を走らうといふのですから、留め手のない限り、その興の盡き、足の疲れ果つる時を待つより外に留めるすべはない。

けれども、まつしぐらに走ること数町にして、かれは踏みとどまり、やはり眞紅に焼けた海のあなただの空に向つて、歌をうたう聲が聞えます。

だが、その歌は音節が聞えるだけで歌詞は聞えない。聞えてもわかるまい。暫く砂濱の上に立つて、例の如く、あらん限りの聲を揚げて歌をうたつてゐたが、眞紅な西の空に旗のやうに白い一點の雲を見とめると、急に歌をやめてそれを見つめる。

白い一點の雲が動く——動いてこちらへ近づいて来る。

一片の雲だけか、夕陽の空を、こつちへ向いて飛んで来るといふ現象は珍しい事だ。殊にその色がいかに白い、時としては銀のやうな色を醸して見せることもある。

雲が自身で下りて来る——眞に珍しいことだ、かれは大海の夕暮に立つて、下界に降り来る一片の白雲を飽くまで仰ぎながめてゐる。

何んの事だ——雲ではない、鳥だ、素敵もない大きな鳥が、充分に翼をのしきつて、夕焼けの背景をもつて、悠々として舞ひ下がつて来るのだつた

信天翁か——とびか、鷹か、みさごか、かもめか、何んだか知らないが、馬鹿に大きな眞白な鳥だ。

そのうしろを黒鉛のやうな夕暮の色が沈鬱にし、金色の射る矢の光が莊嚴にする。

何んだ鳥か——小兒が再び走り出したのはその時からはじまります。雲が心あつておりて来るなら、それに乗りたいたい、だが鳥では用がないとでも思つたのだらう。

鳥の方でもまた、お氣に召さないならば……と挨拶して翼の方向をかへる。

清澄の茂太郎は、またも、まつしぐらに砂濱の無限の道を走る。

遠見の番所も見えなくなつた。駒井の住所も造船所の旗も模糊としてわからない。

空の紅の色は漸くあせて行くと、黒い夕暮の色がそれを包んで行く。たゞ一本、すばらしく長い金色の光が大山の上あたりまで末期の微光を放つてゐるのが残るばかり。

そこで清澄の茂太郎は、また踏みとどまつてあらん限りの聲で歌ひ出した。

音節が聞えるだけで歌詞のわからないのは例の通り——

一しきり、歌をうたうと、またも、西の空の残光に向つて、まつしぐらに走り出す。行くことを知つて歸ることを知らないらしい。この少年にあつては、行くことの危険に盲目で、歸ることの安全が忘却される。

それとも魔はよく兒童をとらへたがる——鼠取の姿を假りて、笛の音でハメリンの町の子を誘

六四七

ひ、それを悉くヴェゼルの河の中に落して溺れ死なしたこともある、天の一方に悪魔があつて、無限に茂太郎を誘引するのも知れない。

果して、その日、晩餐の席に駒井の家には新たに外來の漂泊の愛嬌者の來客を一人迎へたけれど——同時に、いつもゐて食卓を賑す一個の同人を失ひました。

迎へたのは申すまでもなくマドロス氏、失うたのは清澄の茂太郎。

その席で、駒井は幾度か茂太郎の身の上を心配したけれど、岡本兵部の娘は一向それを苦にしな

い。

「あの子は歸りますよ」
この娘は、深山と幽谷と、海濱と人なきところを好む茂太郎を知つてゐる、山に行けば悪獸とも親しみ、海に入れば文字通りに魚貝を友として怖れないことを知つてゐる、茂太郎の不安は繁昌と人氣と淫靡と喧噪の室内に置くことで、山と曠野に放し置くことの絶対に安全なのを知つてゐる。

さればこそ、さいぜんも、まつしぐらに砂濱を走る茂太郎を後ろから、最初のうちは呼んで見たけれども、程なくあきらめて、そのなすがまゝに任せてしまつた。

その晩餐の席には、料理方の金椎も、平等に食卓の一方をしめ、お給仕役は岡本兵部の娘が代り

ました。といつても兵部の娘もまた平等に食卓の一部を持つてゐるのだが、好意を以て金椎の勞をねぎらうために給仕をつとめるものらしい。これによつて見ると、いつもは、清澄の茂太郎もまた、お給仕役をつとめるのだらう、見たところ、田山白雲も、主人役の駒井甚三郎までも、ほとんどこゝでは主客の隔てがないらしい。新來のウスノロ氏は相變らずこの席の人氣者でありました。

兵部の娘に向つて、頻に面目ながつて、ひたあやまりにあやまる形は、また可なり一座の者を喜ばせたやうです。當の兵部の娘さへ笑つて問題にしない位だから、むしろ一種の奇劇的人物の色彩を加へたやうなもので、この一座の鬪々たる家庭ぶりの中に包まれてしまつたやうなものです。この新來客の姓名は當人はトーマスとかゼームスとか名乗つたやうでしたが、田山白雲は快然として、ウスノロがいゝ、ウスノロがいゝ、ウスノロ君と呼べば手つとり早くつていゝではないか——と提案したが、それは少くとも人格に關する、むしろマドロス君と呼ぶうではないか、と駒井の修正案が通過する。

かくてこのまゝマドロス君は、駒井一家の家庭の人として包容されるらしいが、駒井甚三郎の心では、これはこれでまた利用の道がある。當分は造船工を手傳はせ——と心に多少の期待を置いてゐるらしい。

かうして席上は可なり陽氣でしたけれど、ひとり耳の聞えない金椎だけが心配さうに手帳と鉛筆

とを持つて、岡本兵部の娘の前へ出て来て、

「茂ちゃんはどうしました？」

といひながら手帳と鉛筆をさしつけると兵部の娘は直ちに鉛筆を取つて認めました。

「海岸ヲ西ノ方ヘ向イテ行ツテシマヒマシタ、ソノウチ歸ルデセウ」

それを見ると金椎の眉根が不安の色に曇り、思はず窓の外から海の方を見ますと、眞の闇ながら空模様が尋常でない。

二十

宇津木兵馬は、あすは中房の温泉に向けて出立しやうと心をきめて寝につきました。

今頃、中房へ行くといへば唯も相手にしない、案内者ですらも二の足を踏んで引留める位だからこれはむしろ、誰にも告げないで單騎獨行に限ると思ひました。

佛頂寺等の豪傑連はどこを歩いてゐるか、殆ど寄りつかない、そこでこの連中とは同行のやうなものだが、各々自由行動を取つてゐるのだから、斷る必要はないやうなものゝ一應は置き手紙として置かう。——それと防寒の用意だけは多少して行かねばならぬ、場合によつては食糧も——そこで兵馬は明日出立の事を考へて今や眠りに落ちやうとする時廊下をバタ／＼と駈けて来て、兵馬の部屋の障子に手をかけたものですから、ハテ、佛頂寺が歸つたのか知ら、それにしては變

な足音だ。

ハツと眼がさめた。

では女中だらう——それにしても女中ならば、いくら何でも、もう少ししとやかでなければならぬ、寝ついてゐるお客の座敷へ来るには一應の挨拶もあるべきものを、バタ／＼と駈けて来て障子へ手をかけると、早くもそれを引き開けて、何にもいはずに勢ひよく闖入したものですから、兵馬もこれは變だと思ひました。

斯ういふ場合においての兵馬は金椎とは違ふ。兵馬は不具でない耳を持つてゐると共に、敵の動靜に對しては極めて敏感なる武術の修養を持つてゐる。何者の闖入者が、いかなる場合に來てもよし熟睡中にも來ても、うろたへないだけの心得はある。だから、おのれを守る意味においては金椎あたりとは全然比較にならないのです。ハツと眠りをさまして、半眼でもつて、早くもその闖入者の動靜を見て取つてしまひました。

ところがこの闖入者もまた、金椎の場合におけるものとは全く舉動も性質も違つてゐる。あの時のやうに、一應外からのぞいて見たり、音なうて見たりして、徐に闖入に取りかゝるといふのではなく、バタ／＼と駈けて来て、いきなり障子を開けて、一言もなしにツカ／＼と人の座敷へ入り込むのだから可なり大膽なものです。

けれども、この大膽者は兵馬を怖れしめないで、驚かせるには驚かせたが、むしろ駭然としてあ

きれ返るやうに驚かせたのです。この闖入者は赤いひげのマドロス氏とは違つて髪かみになまめいた女でありました。

それは特に目ざましいもので、男鬚にゆつて、はなやかな縮緬の繻絆をつけた手古舞姿の藝者でありましたから、兵馬といへども呆氣に取られないわけには行きません。は、あ、今夜はお祭りで手古舞が出て大騒ぎであつた、だが、手古舞がこゝへ舞ひ込んで来るのは、どうした事の間違ひだ。

兵馬は寢たまゝで半眼を開いて、非常な驚異で手古舞の舉動を注視してゐると知るや知らずや、手古舞の無遠慮はいよゝ甚だしいものでいきなり、火鉢のところへ来てべつたりと座つてしまひ、右の手で火鉢の上の鐵瓶を取ると左の手で、湯呑みを引つくり返しもうさめてしまつた鐵瓶の湯をその湯呑みの中につぐと、仰向けにグツと傾けてしまひました。

遠慮のない奴もあつたものだな、兵馬は呆れながら、なほ油斷なくその舉動を注視してゐると、お湯を飲むこと、飲むこと、立てつゝけに、何杯も何杯もあほりつけて、忽ち鐵瓶を空にしてしまひました。

鐵瓶が空になつたと見ると、それを下へ置いてゲツといふ息をついて、トロンとした眼で室内をながめて、ぐつたり身體を落ちつけてゐるところ。

は、あ酔つてゐるな、酔つて戸惑ひをしたな。

本来ならば兵馬は、そこで穩かに警告を與へて立ち退きを命ずべき筈であつたが、放つて置いても、やがて當人が氣がついた時は、いはれるまでもなくほうくの體で立ち退くだらうと、タカをくゝつたものらしく、だまつて女のなすがまゝに任せてゐると、

「房ちゃん、いゝ加減にしてお起きなさいよ、花ちゃんのお歸りよ、お起きなさいな」といひました。

それでも返事がないものだから女は、

「狸をきめても知らないよ、ほんとに獨り者はいゝ氣なものさ」

まづ自分がどこへ來てゐるのかお氣がつかれぬらしい。

「ほんとに疲れた、わたし、こんなに疲れたことはないわ、こんなにお酒を飲ませられちゃつたの……房ちゃん、後生だから起きて介抱しておくれな」

それでも、まだ返答がない。

「何て不實な人でせう、一體、獨り者なんてみんな不實に出來てるのよ、起きないと承知しないよ」

この分では起しに來るかも知れないと、兵馬はヒヤリとしたが、これは女の虚勢で、口さきだけのおどしに過ぎないものだから安心する。

その時、女が頬に壁の上を撫で廻してゐるのは、多分、煙草がのみたくなつて、煙管をさがして

あるものらしい。ところが、なか／＼手にさはらないものだから、ぢれつたがり、

「あゝ、つまらない、折角歸つて來ても、お歸りなさいといつてくれる人はなし、お湯は冷めきつてしまつてるし、煙草まで隠してしまはなくつてもいゝぢやないの」

何かにつけて突つかゝりたがるこれはしたゝかに酔つばらつてゐる證據である、兵馬は厄介者が舞ひ込んだなと思ひました。併し、警告を與へて立ち退きを命ずるより、當人の氣のつくまで待つた方が世話がないと、身動きもしないで寢てゐると、この闖入者は、金椎をおびやかした者よりも遙に氣が強く、トロンとした眼を兵馬の寢てゐる方へ据ゑて、

「お起きよ、房ちゃん——今日のお祭りに、面白い彌次馬が出たことよ、妙なおぢいさんが飛び出して來てね、すつかり世話を焼いぢまつたの、随分、皮肉なおぢいさんよ、それでも、なかなかいふ事が通つてゐるから油断がならないのさ、それと、もう一つ面白い事はね……お聞きなさいよ、起きてお聞きなさいれば、若い癖に何だつてさう早寢ばかりしたがるの、寢られないやうな苦勞もして御覽な、若いうちにはさ、その代り寢られないやうなうれしい思ひもさせて上げるからさ、一年に一度のお祭りぢやないの、夜どほし起きて騒いだつて罰は當るまいぢやないか、狸をきめたつてわかつてる事よ、くすぐつて上げるよ、それでも起きなけりやツネつて上げる事よ、それがイヤなら妻直にお起き」

今にも飛びついて來るかと思ふと、やはり口先だけの虚勢で、頭をぐつたりと火鉢の前に下げて

しまひ やがてそれが横向きになると火鉢のふちへひちを置いて、頬杖をついて息づかひが極めて静かなものになりました。

急におとなしくなつたものだから、兵馬も一層張り合ひが抜けて、まあ邪魔にもならないのだから、そのままといふ氣になつて、自分は寢返りを打つて縮入らうとしたが、さうは急に眠れない。

そのうち、急におとなしくなつたかの女が、いよ／＼おとなしくなつたものですから、若しやと思ふうちに、スヤ／＼と眠りに落ちた息づかひですから、

「おや、おれより先に寢つたのか」

兵馬は驚いて、枕をそば立てゝ見ると、女は疊の上に顔を枕にして、いゝ心持で横になつてゐる。斯うなつては仕方がない、ゆり起して歸すより外に手段がないと帶引きしめて兵馬は起き出して來ました。

前後も知らず寢込んでしまつてゐる女を兵馬が見ると、さまで醜いとは思ひませんでした。本來女の酔つばらひほど醜いものはないのに、これは醜いといふよりは却つて絢爛にして目を奪ふといふ體たらくです。

友禪といふのか、縮緬といふのか知らないが、これは眼のさめるほどの極彩色の衣せうをつけて無難作に片はだぬきの派手な繻紵のこれ見よがしなもの、そんなにキザとも思はれず、つやく／＼

した髪を男まげに雄直に結び上げたところもいや味にはならず、何だか豪侠な氣が胸に迫るやうにも思はれます。それに、こつてりと濃い化粧をした女の顔も吉原あたりで見る鐵火のやうなところもあつて、年も二十を幾つか越した位のところ、藝者としては今を盛りの藝者ぶりで、立派に江戸藝者で通るほどの女でありましたから、兵馬も一時はあわてました。

やがて、そばへよつて女の肩のところに手をかけて、

「もし、起き給へ！」

と軽くゆすりましたが、女は少てもこたへがありません。

散々に疲れた上に充分に酔つてゐる。酔つて場所の見さかひのないほどになつてゐるのだから、手ごたへのないのも無理はあるまい。

「起きなさい！」

そこで、兵馬は二度目には以前より手づよくゆすつて見ました。

でも、ちよつと女が肩のあたりを動かして口をゆがめたよけで、さつぱり手ごたへがありません。

この上は、手荒くたゞき起すか、さうでなければ、さいせんこの女が威嚇したやうに、急所を突ツつくか、痛いところをツネるかしない事にはお感じがあるまい。

兵馬は、この女から起きろ／＼と威嚇されたことを、今度は自身の方から試みて、どうでもこの女の目をさませねばならぬ立場に變つたことを突止がらずにはをられません。

併し、ツネつたり引つかいたりすることは兵馬の得意とするところではありません、やむなく、正攻法によつて、以前より強い刺戟を與へて、驚かすより外はなく、

「さあ、起き給へ！」

これでもかと、兵馬は思ひきつて力を入れて女をゆすると、さすがに、女も夢を驚かされましたその機會をすかさず二度三度突くと、女は漸く頭を起して、酔眼を見開いてどこともつかず打ちながめてゐるから、

「こゝは君の來るべきところではない、起きて歸りなさい」

兵馬は、そこで手をゆるめて、忠告を加へたが、酔眼と、ねぼけ眼で見返した女の心には、まだ何にもハツキリした觀念がうつらないらしい、さうして物うげに、

「いゝのよ、いゝのよ

といつて、またもひお枕で横にならうとするから、兵馬はあわて、

「いけない、眠つてしまつてはいけない！」

「打ツちやつといておくれ、かまはないから——」

こちらでいふべき事を、あちらでいつて、女はまた寢込んでしまはうとするから、兵馬は荒々しく、

「しつかりし給へ！」

荒々しく、邪けんに女を動かして、寝つかせないものだから、女もたまらなくなり、ぢれつたさうに、

「意地が悪いねえ、こんなに眠いんだから寝させたついでにぢやないの？」
それをも頓着なしに兵馬は、

「起きろ、起きろ！」

ちつとも、惰眠の隙を與へないものだから、女は、むつくりと起き上がりました。

あゝ、気がついたか、世話を焼かせる女だ——とやつと少し安心してゐると起き上がった女は、
「酔眼もうろうとして座敷の中をながめてゐるが、

「あゝ眠い……」

といつて脱兎のやうに兵馬の寢床へもぐり込み、夜具をかぶつてしまひました。

あゝ、これでは、また虎を山へ追ひ込んだやうなものだ。

あゝ、手がつけれない！兵馬も、うたゝ感心して、闖入者といふものゝ扱ひにくい事を、今更しみくくと身に覺えたのでせう。

この闖入者は食に飢ゑたのではない、眠りに飢ゑてゐるのだ。色慾よりは食慾、食慾よりは睡眠慾が人間に堪へ難いと聞いた。

自分の寢床へもぐり込まれてしまつて、兵馬は啞然として舌をまいたけれども、斯うなつて見る

と、却つてをかしくもあり、同情心も出て來るので、この上に一層荒々しく、夜具を引きめくつて、女をつまみ出さうといふ氣にはなりません。

却つて、まあ、寝るだけ寝させて置いてやれといふ氣になりました。

兵馬には、人に同情し易い癖がある、癖といふよりもこれは徳といつてしかるべきものかも知れない。自分の足場のかたまらないうちに他に對しての同情は禁物——とそれは兵馬も充分に心得てをりました。充分に心得ながら、ツイ吉原へ足がむくやうになつたのは、抑々この同情がいけなかつたのだと、のぼせきつてゐるうちにも、よくその理解はついてをりました。
今だつてさうです。

酔つばらひは嫌ひである。男の酔つばらひでさへ醜態と思つてゐる兵馬が、女の酔つばらひといふものをこの世における最も醜いものゝ一つに數へたいのは、あながち潔癖とばかりもいへずまい。

だが、斯うして、ころがり込んで見ると、それを引とらへて面罵をこゝろみたり、たゞき出した
りするやうな氣になれないことが自分の弱身だと思はないでもない。人にいへれば相手が相手
だから、それでのろいのだと笑ふかも知れない。

さて、女の酔つばらひを醜態の極として、日ごろ排斥はしてゐながら、斯うして見ると、やはり
一種の同情が兵馬の胸には起るのを禁することが出来ません。

どの道、斯ういつた社會の女だから是非があるまい。自分が嫌ひでも客のすゝめで飲ませられる事もあるだらう、また中には酒でも飲んで心を荒まして置かなければたまらない女もあるだらう、どの道、好んで斯ういふ社會に入りたがる女ばかりあるものではないから、こゝに來るまでにはそれ〴〵相當の身の上を以て來たのだらうから、それを一々、きびしい世間の體面や禮儀で責めるのは、責めるものが酷である。むしろ、斯うして、前後もわからないほどに酔つぱらつて、人の座敷へころがり込み人の寢床へもぐり込んで寢てしまふやうなところにたまらない可愛らしさがあるではないか——世間の娘や、令嬢たちに、こんな振舞をしるといつても出來まい、それを平氣でやり通すやうになつてゐるところに無限の不びんさがあるではないか。

奥深いところにゐる——奥深いところでも、普通のいはゆる良家の女性には、どんなにしても、さうなれ近づくわけには行かないが、この種類の女に限つて、いかなる男子をも近づけてその醜弄をさへ許すのである——その解放は放縱であるとはいへ、その放縱によつて救はれなかつた男性が幾人ある？

兵馬はこの種類の女を憎いとは思はない、それは清純なる男子の近づくべからざる種類のものでもあるとは教へられてゐながら、今までもさのみ憎むべきゆゑを見出せなかつた。

だから、こゝでも、その睡眠を奪ふ氣にはなれず、よし〴〵このまゝ寢るだけ寢かして置け、寢るだけ寢たあととさめるまでの事だ、こよひ一夜は、自分の寢床を犠牲にしたところで功德には

ならずとも罰は當るまい。

兵馬もこの頃は世間を見てゐるから、それとなく粹を通すといふやうなユトリが出來たのかも知れませんが。

そこで女は寢るまゝに任せて、自分は荷物を枕に合羽を引きまとうて、火鉢のそばへ横になりました。

二十

夜が明けると兵馬は早立のつもり、女はそのまゝにして置いて、出立してしまはうと、まだ暗いうちに浴室まで出かけました。

ところが、その浴室には、もう朝湯の客が幾人かあつて、口々に話をしてゐる。それを兵馬が聞くと意外でした。

その浴客等の噂は、昨晚、藝者の墮落ちといふことで持切りです。はてなと兵馬が氣味悪く思ひました。

聞いてゐると、松太郎といふ江戸生れの藝者が、昨晚、急に姿を隠してしまつたといふ事。

宵のうちには手古舞てこまいに出て、夜中過ぎまでお客様と飲んでゐたのを見たといふことだから、逃げたのなら、それから後の事だといふ。そこで兵馬が思ひ當ることあつて、なほ、その噂に耳を傾け

てゐるとその藝者の身の上やら想像やら。
そのいふところによると、松太郎は江戸の生れでこの地へつれて來られたのは二三年前であつた
とのこと。

旦那があつて自由にならなかつたといふこと。

それで少し自暴の氣味があつてお客を眼中に置かないやうな振舞が度々あつたが、旦那といふの
は、その御機嫌をとるやうにしてゐたといふこと。

こつちへ來るまでには、相當の事情があつたのだらうが、來た以上は當人も往生しなければなら
ないと知つて、わがまゝではあつたが、お客扱ひは悪くはないから、熱くなつてゐるものが二人
や三人ではなかつたといふこと。

それでもまだ、旦那の外に男狂ひをしたといふ評判は聞かない。

だから今度のも男と逃げたのではあるまい、土地がイヤになつて、江戸が戀しくなつたのだらう
といふ想像。

いや、旦那といふのが、しつこくて、わからず屋で、その上に焼き手と來てゐるので、それで松
太郎がいや氣がさしたのだらうといふ。

さうではない。それほどの、わからずやでもない、可なり體揚たいやうなところもあつて、松太郎も何か
恩義を感じてゐたと見え——松太郎自身も、近いうちこの稼業をやめて、本當のおかみさんに

るのだとふれてゐた事もあるのだから、まんざらではあるまい、嫌つて逃げたわけでもあるまい。
しかし、あゝいつた女は當になるものぢやない、とうの昔に、男が來て、しめし合せて置いて、
ゆうべの下サクサまぎれに、首尾よく手を取つて逃げたのだらう——その男の顔が見てやりたい、
土地の者ぢやあるまい、江戸の色男だらうと、指をくはへる者もある。

そこへ三助がはいつて來て、旦那なるものゝ噂になると兵馬をして全く失笑せしめる。

ゆうべ、女に逃げられたと氣がついた旦那なるものゝ血眼になつて、あわて出した擧動きやうどうといふも
のが、三助の口によつて、本氣の沙汰に聞こえたり、冷やかしにされたり、散々なものとなる。

はゝあ、眠るといふことは大した魔力だ。白隠びやくいん和尚おやうは船の中で眠つて、九死一生の難船を知らな
かつたといふが、自分は眠つてしまつたから、昨晚あれからその旦那なるものゝ、うろたへ加減
血迷ひ加減、また上を下へと、その逃亡藝者を探しまはつた人達の狂奔といふものを全く知らな
かつた。

聞くとところによると、その旦那なるものは、半狂亂の體で、自分が先に立ち、人を八方に走らせ
て、くだんの藝者の行方を探索させたのださうな。お義理で、こゝのうちの雇人達も、朝まで寢
られなかつたとの事。

併し、その結果は絶望で、可愛ゆい藝者の行方は、どうしてもわからない。

手のうちの珠をとられた旦那といふものゝ失望落膽は遂に嫉妬しよと邪推じやいに變つて、誰ぞ手引をして、

逃がした奴があるに違ひない、さうでなければ、これほど手際よく行く筈がない——見てゐろ、と自暴酒を飲んで焦れてゐるといふ事。

兵馬は浴衣を手に通しながら苦笑ひを禁ずることが出来ません。

兵馬は異様な心持で浴室から自分の座敷へ歸らうとするその廊下の途中で、また一つの座敷から起る唼音そらごんに驚かされてしまひました。

その座敷の中で、俄に唼をうたひ出したものがあるのです。多分それは寢床の中しよどにゐて、宿酔しよどのまださめない御苦勞なしの開放題だと思はれますが、

ヤレ出た 鬼熊

ソレ出た 鬼熊

そつちを突ツつけ

こつちを突ツつけ

そつちでいけなきや

こつちを突ツつけ

こつちでいけなきや

そつちを突ツつけ

ヤレ出た 鬼熊

ソレ出た 鬼熊

ヤレソレ 鬼熊

ドッコイキタコリヤ

圖づか抜けた聲で唄ひ出したものがありましたから、通りかゝつた兵馬が、その聲に驚かされたのです。併し、兵馬は、たゞ驚かされただけではなく、その早朝から馬鹿くしい圖づか抜けた聲に何か聞き覚えがあるやうに思はれるのも一層兵馬を驚かしたことに力があつたかも知れません。

さりとて、わざ／＼障子を明けて、その圖づか抜けた唄の主の首實檢をしなければならぬほどに聞き慣れた聲でもありませんでしたから、これにも一種異様の可笑しさをこらへてそのまゝおのが座敷の方へと足を進ませてしまひました。

兵馬が驚き、また何となし記憶を呼び起され、遂に一種異様の可笑しさを感じしめられたのも道理。この聲の主こそは即ち有名なる道庵先生でありましたのです。

ですから、もう少し何とかすれば、兵馬も先生に顔を合せることが出来て、お互に知らない間柄でもないから、これは／＼と、額に手を置いて、それからお互に多少實になる話があつたかも知れません。

もとより、道庵先生も、その事は知るに由なく、今や蒲團の中に仰向けになつて、起きもやらず大聲でたゞ今の

ヤレ出た、鬼熊

をやり出したのであります。

こゝに道庵先生が呼ぶ「鬼熊」といふのは千葉縣ながし村の悪漢をさしたのでないことは無論、また道庵先生自身の頭が、タガといふものがゆるみきつて、底知れずにダラけきつてしまったものだから、ついこんな事を口走るやうになつたといふわけでもなく、別にその時代にも鬼熊といふ名物が確に存在してゐたのであります。

それを嘘だと思ふものは、現代の鬼熊が活躍した、その同じ千葉縣の成田の不動堂へ行つてごらんなさるとわかります。かしこには立派にその時代の鬼熊の額がかけてある。

その時代の鬼熊は現代の鬼熊のやうに兇暴ではなかつたが、力量はたしかに現代の鬼熊以上でありました。

これは今日でも實見した人があるかも知れない。

神田鎌倉河岸の豊島屋の「樽轉」から出た鬼熊は何代目とつゞいて、酒樽を手まりの如く取つて曲持曲差を試むる。新らし橋の附近には何貫何百何代鬼熊指とほつた大石がころがつてゐた筈。醬油樽一つづゝを左右の手にさげ、四斗樽を一つづゝ左右の足にはいてこの鬼熊が柳原の土手を歩いたことがある——見るほどの人が、その樽を空だらうと疑つて調べて見ると、空どころではない、豊饜の新味が充實しきつてゐる。力持の見世物に出ても鬼熊が大關でありました。

道庵先生が、ヤレ出た鬼熊ソレ出た鬼熊、そつちを突ツつけ、こつちを突ツつけ、また出た鬼熊——と蒲團の中から首を出して騒いでゐるのは、その鬼熊がこちらへ興行に來たのかも知れない。それを聞き流しにしておのれが屋敷に戻つた宇津木兵馬。

例の女はまだよく寝てゐる。眼をさませないやうに、充分寝るだけ寝させて置くやうに、兵馬は成るべく音を立てないで、出立の身仕度にかゝりました。

併し、兵馬のこの心づかひも忽ち無駄になつてしまひ、女ははからず目をさしました。目をさました當座は何でもなかつたが、枕ざはりが變だと、それから氣がついたのでせう、急に飛び起きて、

「あら！」

その驚き加減といふものはありません。

これは氣の毒な事をしたと兵馬をしてヒヤリとさせたほどです。

「まあ、わたしどうしませう？」

飛び起きて、そこに脚絆をつけてゐるところの兵馬を見る。

「まあ、どうして、わたし、こんなところへ來てしまつたのでせう？」

「ハハハ……」

と兵馬が笑ふ。女は笑ふどころではない、くちびるまであをくなつてゐる。

「御免下さいまし、本當に済みません」

「いや、いゝですよ、御ゆつくりお休み下さいまし」

「存じませんのですから……」

女は飛び起きて、なりふりを直しにかゝると兵馬は、

「みんな大變心配したさうですよ」

「あゝ、わたしとした事が……つい酔つたものですから、あなた様にも、どんな失禮をしたかわかりません」

「不意にこゝへ君が来たものだから、多分部屋違ひだらうと思つて、歸るやうに忠告したのだが君が聞かない」

「あゝ、悪うございました」

「君が聞かないでゐるうちに、こゝへ、この疊の上へ寢込んでしまふから、見兼ねて、拙者が起しに来ると、早くも拙者の寢床を奪つて君が寢てしまつた」

「済みません、済みません」

「その時、無理にでも起せば起すのだつたが、それほど眠いものと氣の毒に存じ、そのままにして、君をそこへ寢かして置いて拙者はこゝへゴロ寢をしてしまつたよ」

「ま、何といふ失禮なことせう、これといふのもお酒のせみです、もう わたし、これからお

酒をやめます、一滴もいたゞきませんから、どうぞ御勘辨下さいまし」

「酒はやめた方がいゝな……」

「後程、またお禮に出ますから——」

と、なりふりを直した女は、あをくなつて恐れ入つたり恥入つたり、ほとんど前後も忘れて駆け出さうとするから、

「まあ、お待ちなさい」

兵馬は脚絆（きんぱん）を結びながら呼び留める。

「ほんとに、あなた様なればこそ、こんなに御親切にして下さいました。外のお方でしたら、わたしはどんな目に逢つてゐたかわかりません」

「いや、それが却つて仇となるやうではお互に困るから、氣をつけて歸り給へ。君の旦那といふのが非常に腹を立つてゐるさうだ」

「さうかも知れません」

「たゞ今、浴槽（ゆたか）で聞いたのだが、昨晚は君の姿が見えないために、總出で探し、どうしてもわからないから、君は匿落（かくらく）をしてしまつたものときめてゐるらしい」

「え……？」

「だから、そのつもりでお歸りなさい。事がむづかしかければ、拙者が行つて、證人に立つて上げ

るから——」

「さうかも知れません、さうだとすれば、わたしはひどい目に逢はなければならぬかも知れません、あゝ、どうしたらいいでせう。でも、歸らなかりやならないわ」

「もし事が面倒になつたらお知らせなさい」

驚きあわてゝ出て行く藝者の後姿を見て、兵馬は笑止の至りに堪へません。

そこで兵馬は早立をすべき管のを、わざとゆつくり構へ込んで朝飯を食べました。

何か苦情が起つた際には、あの女のために證人に立つべき義務があると思つたからです。併し、幸ひ、別に問題は起らないと見えて、出て行つたきり音も沙汰ありませんから、話といふものはすべて大仰なものだ、噂によると、あの旦那なるものは生かすの殺すのと騒ぎ兼ねまじき話であつたが、何の、事なく納まつたところで見ると、すべて、女にのぼせる男といふ程のものはのろい者で、女が眼前へ現れて、泣いたりあやまつたりしやうものなら忽ち軟化してしまふ。その旦那なるものも忽ちぐんなりと納まつたのだらう。それならば結句仕合せであると思ひました。兵馬は、そのあられもなき艶罪えんざいをおそれてゐたのは、以前紀州の龍神でも、そんな事から、痛くない腹をさぐられた經驗があるので、聊か取り越し苦勞が過ぎたものゝやうに感じながら食事を済ましてしまひました。

さうして無事に淺間の宿を立ち出で、松本の市中に入ると間もなく、兵馬は佛頂寺彌助と丸山勇

仙とが勢ひよく談笑しながらやつて来るのを遠くから認めて、場合が悪いと思ひました。こゝで見つかつてはまづいと思つたものですから、知らない顔で、やり過ごしてしまはうと、自分は道の右側を小さくなくて通ると、幸ひに、佛頂寺も丸山も談笑の方に氣を取られて、兵馬あることに氣がつかず、難なくやり過ごしてしまひました。

やれ、安心と兵馬は、やり過ごして暫くしてから見送ると、佛頂寺は兎、丸山は雉子を携へてゐました。

あの連中、どこぞ押しかけ客に行つて、みやげ物もらつて早朝から御機嫌よく歸るところを見ると、その到着先は淺間の宿に定まつてゐる。いゝ事をした。出立が、もう少し遅れやうものならば、あの連中につかまつて迷惑をするのだつたに、まあよかつたと思ひましたが、同時に昨晚歸つてくれないでなほよかつたと思ひます。

昨晚、若し佛頂寺、丸山等が合せたところへ、あの女が飛び込んで来たならば、事は無事には納まらないと思ひ來ると、兵馬は怖れて却つてあの女のために幸運を賀するやうな氣持になります。

全く、その通り、かりに二人がゐたところへ、あの闖入者かんにゅうしやがあつたとしたら、さうして、あの女があつたまゝを働いたとしたらどうだらう。もしまた兵馬がゐないで、佛頂寺と丸山だけがある座敷へ、あの女が飛び込んでしまつたらどうだらう。それは想像するまでもない。自分の寢床

を明けて女に興へ、自分は疊の上に寝て一夜を明かすといふやうな寛容な光景が見られるものか見られないものか。鴨が葱を背負つて飛び込んで来たやうなもので、二人のためにうまくと食はれてしまふのは眼に見えてゐる。

あれで済んだのは、自分のためにも、殊に女のためにはドレほど幸運であつたか知れないと、兵馬は二人の後ろ影を見送りながら、氣まぐれな酔っぱらひ藝者のために、心ひそかに祝福しました。

行き／＼と、町のとある辻まで来た時分、そこに一つの立札があるのを認め、兵馬が近寄つて、それを眺めると。

信濃國温泉案内

とあつて、松本を中心としての各地の温泉場までの里程道筋が、繪圖まで添へて掲げてある。時にとつての好き道しるべと、兵馬は餘の方面はさて置き、自分の目的地方面をたどると端しなくそこに一つの迷ひが起りました。

わが行手にあたつて、同じく西の方の大山脈のふところに、少くとも二つの主なる温泉がある。右なるは現在目的とする中房の温泉、左なるは『白骨』と書いてある。兵馬はそれは一たびはシラホネと讀み再びはハクコツと讀みました。

二十一

案の如く佛頂寺丸山の二人は、宇津木兵馬が立ち去つてしまつたあとの、同じ座敷へ歸つて來ました。

そこで机の上にあつた兵馬の置き手紙を見て、はアとうなづいたきりで深くは念頭にとめず、やがて、御持參の雉子で酒を飲みはじめたやうです。

この連中は、人生の離合集散も哀別離苦もさのみ問題にはしてゐない。けふあつてあすはなき命と覺悟はきまつてゐる。さうしてあすは鴉がかツかじるべえともいはない。感傷がましい言葉が敢てかれ等の口の端に上るといふことを知らないほど無感覺に出來てゐるらしい。

ところが、こゝに一つの悪いことは、兵馬の取り越し苦勞が、この時分になつて漸く利き目を見せたことで、利き目の見えた時分は相手が悪くなつてゐました。

佛頂寺と丸山とが斯うして仲むつまじく、一つ鍋を突ツつき合つてゐるところへ喧嘩を賣りに來た奴があるのだからたまらない。

「眞平、御免なせえまし」

といふすご味を利かせたつもりなのが、目白押しになつて不意に押しかけて來ました。

「ナ、ナンダ？」

と鍋の中へはしを半分入れながら、佛頂寺彌助が睨み返すと、

「旦那方、御冗談もいゝ加減になすつていたゞきてえもんでございます」

そいつ等がズカ／＼とはいつて来て、膝つ小僧をズラリと佛頂寺丸山の前へ並べたものですから何條たまるべき、

「何がどうした！」

「御冗談もいゝ加減になすつていたゞきてえもんでございます」

「何が何だと！」

「へへへへ、御じようだんもいゝ加減になすつていたゞきてえもんで、そんなこわい目をしたつて驚く兄さんとは兄さんが違ひますよ旦那方！」

「何が何だ！」

佛頂寺がこぶしを膝に置いて向き直る、丸山勇仙も肉をバクつきながら、途方もない奴等が舞ひ込んだものだと思ひました。だが、向兩人共に、事の仔細がわからない、こいつあの芝居の場の狼狽を根に持つ奴がならず者を廻したのだらう——と一時はさうも思ひましたが、それとは少しどうも呼吸が違ふやうだ。

そこで、佛頂寺ほどの豪傑も先づ手が出ないで何が何んだと煙にまかれたやうな有様であると、

「おトボけなすつちやいけねえ、人の大切の玉を散々おもちやにして置いてからに……」

と並べた膝小僧を一齊に前へ進めるものですから、佛頂寺彌助が、

「誰が、玉をおもちやにしたといふのだ、一體、貴様達、斷りもなく他人の室へ闖入して、その物のいひザマは何だ」

といひながら箸を置いて火箸を取ると、鍋の下にカン／＼おこつてゐる堅炭の火を一つハサんでいきなり、それを一番前へ乗り出してゐた膝つ小僧へデリーと押ツつけたものだから、

「あつ、つ、つ……！」

その奴さんが、ハネ上がつて熱かりました。で、その騒ぎの納まらないうちに、佛頂寺は、

「こいつも少し出過ぎてる！」

といつて、もう一人並んでゐた奴さんの今度は膝小僧ではなく額のお凸へその火を押ツづけられたのだから、同じく、

「あ、つ、つ、つ……！」

といつて飛び上がりました。

「この野郎、もう我慢が出来ねえ」

餘の奴さん達が、佛頂寺をなぐりにかゝるのを、佛頂寺は左の手で膝元へ取つて押へ、その胸をしつかり自分の膝の下へ敷き、片手では例の堅炭の火を取つて、その奴さんの小びんの上へ置くと、毛と皮とがヂリ／＼と焦げて来る。

「あ、つ、つ、つ……！」

これは動きが取れないから焼け穴が出来るでせう。
そこで宿の亭主が飛んで出るの幕となりました。

何はトモあれ、取り押へられてゐる者のためにおわびをして執りなしをして助けて置いてからの事。

亭主が口を盡してわびるので、佛頂寺は焼け穴をつくるだけは見合せて、火箸を灰の中に突き込み、

「亭主、よく聞きなさい、われ／＼二人は昨晚城下のあるところへよばれて御馳走になり今朝戻つて、この座敷で二人水入らずに酒を飲んでゐるところへ此奴等が、いきなり闖入して来てわれ／＼の前へその薄ぎたない膝小僧を並べるのだ……一體こいつ等は何者で、何しに來たのだから一向わからん、また、こいつ等のいふ事が、ガヤ／＼騒々しいばかりで何をいつてゐるのか一向わからん……たゞ、無暗にこの薄汚ない膝小僧を折角われ／＼がうまく酒を飲んでゐる眼の前へ突き出すから、聊か折檻してやつたのだ、お前の顔に免じてこの位で許してやるまいでもないが、一體、何の恨みでわれ／＼に喧嘩を賣りに來たのだから、亭主、そこでお前からよく問ひたゞして見てくれ、さうして本人が成程悪いと氣がついたらあやまるがよからう」

佛頂寺から斯ういはれるまでもなく、仲裁に出る時に、もう亭主はそれを氣がついてゐるので、

この奴等がたのまれておどしに來た當人はもうすでに立つてしまつたのだ。こゝへあの藝者がころがり込んで一夜を明かして、泣き出しさうな顔で立ち去つたことを亭主は知つて知らない顔をしてゐたのだ。昨夜あれほど探したのに出て來ないで、今朝になつて早く飛び出したのは、どういふわけだか、これは亭主は知らないが、兎に角この座敷へ昨晚泊つた事は確である。

さあ、この後日に間違ひがなければいゝかとヒヤ／＼してゐるうちにこの座敷の主人即ち兵馬は無事に出立してしまつたから、まあ宜かつた、どう間違つても、當人さへ出て行けば相手のない喧嘩は出來ないのだから、まあ何とか納まるだらうと、ホツと息をついてゐるところへ佛頂寺等が歸つたものだから、また新たな心配が起らないでもありません。

それに心を残して髪結ひに行つてゐる間に、この騒ぎが持ち上がつて、人が迎へに來たものだから急いで駈けつけて見ると、果してこんな事になつてしまつてゐる。

まあ、まあといつて、その膝小僧連をつれ出して委細をいつて聞かせ、お前達が喧嘩を賣りに來た當の相手は、モット若い人で、それはもう立ち去つてしまひ、今ゐるのは昨日は他へ泊り、今朝あの座敷へ戻つたばかりの別の人である。お前達、何といふそゝつかしい事だ、喧嘩を賣る前に一度、わたしに相談をかけたらいゝぢやないか、飛んでもない相手に喧嘩を賣りかけたものだ——といつてたしなめると、膝小僧連も一同ハニかんでしまひ、では出直して來るといつて、そこ／＼に立ち去る。

そのあとで、亭主は改めて佛頂寺等の前へ出て、その勘違ひの失禮の段々を事をわけて話してお
わびをする、佛頂寺丸山は興多くその物語りを聞いてゐたが、

「おやく、それは意外に色気のある話だ、まさか兵馬が藝者をこれへ引つ張り込んで一晩泊
めたとも思はれないが、藝者がまた何と思つて兵馬のところへ戸惑ひをして来たのか、それもわ
からない……さうだ、亭主、その藝者を一つこれへよんでくれ」

と佛頂寺がいひ出したので亭主がハツとしました。

これは餘計な事をしやべり過ぎた。よびに行つたつて来る筈はない、来ない、といったところで
この連中、さうかと引つ込む人柄ではない。

いはでものを口走つてしまつたと亭主が後難の種を自分でまいたやうに怖れ出したのも無理は
ありません。

併し、この亭主の心配も取り越し苦勞で、佛頂寺丸山の兩人は、酒を飲んでゐるうちに、いつし
か藝者の事は忘れて、酒興に乗じて、何と相談がまとまつたか、やがてあわたしくこゝを出
立といふ事になりました。

二人の相談によると、急に長野方面に立つことになつたらしい。

この連中、思ひ立つことも早い、出立も早い、早くも、旅装をととのへ、鞆定を拂つて宿を出
てしまひました。

だから、宿の主人はホツとして、第二の後難を免れたやうに思ひます。

これ等二人の行方は問題とするに足りない、問題としたつて方寸の通りに行動するものではない
長野へ行くといつて木曾へ行くか上田へ廻るか知れたものではない。

だが、かうして宇津木兵馬も去り、佛頂寺丸山も去つた後の宿に、棒事が一つ持ち上がりました。

さては、まだ滞在中の道庵先生が、何か時勢に感じて風雲をまき起すやうな事をやり出したか。
さうでもない。

昨晚のあの藝者が井戸へ身を投げてしまつたといふ事。

聞いて見ると事情はかういふわけ。あの女の旦那なるものが嫉妬の結果、あの女を縛つて戸棚の
中へ入れて置いて、その前で散々いびつたとの事。

さうして置いて、寝込んでしまつたすきをねられて、多分、手首を縛つた繩を口で食ひ解いたも
のと見えるが、首尾よく戸棚から逃げ出してしまつた。

眼がさめて後、旦那殿は、戸棚をあけて見るとゐない！

そこで、また血眼になる。本来、憎くて折かんしたわけでも何でも無い、むしろ可愛さ餘つて折
かんしたのだから、かうなつて見ると自分があやまりたい位なものだ。そこで、昨晚の騒ぎが再
びブリ返されると間もなく、飛報があつて、女死體が井戸に浮いてゐる……

忽ち井戸の周圍が人だかり、押すな押すなで井戸圍からのぞいて見ると、さまで深くない水面に

ありと見えるのは、まがふべくもない昨晚の手古舞の姿。

あゝ、嫉妬がついに人を殺した。焼餅もうっかりは焼けないと騒ぐ。旦那殿は意地も我慢も忘れて、自分が溺れでもしたやうに大聲をあげて救ひを求め。

水に心得たものがあつて、忽ち井戸へ下りて行つたが、つかまへて見ると意外にも、それは着物ばかりで中身がなかつた。

但し、その着物ばかりはまがふ方なき昨晚のあの藝者の着てゐた手古舞の衣。

では、中身が更に水底深く沈んでゐるに違ひない、水練の達者は水面は浅いが水深は可なり深い水底へくゞつて行つたが、やゝ暫くあつて、浮び出た時には薬をも搦んではゐなかつた。

つゞいて、もう一人の水練が、飛び込んで見たがこれも同様。

水深一丈もあるところを沈みきつて隈なく探しはしたけれど、何等の獲物がない。

そこで、また問題が迷宮に入る。衣せうだけがあつて中身がないとすれば、その中身はどこへ行つた。

あゝまた一ぱい食つた！ 大閻秀吉が蜂須賀塾にゐた時分とやらの故習を學んで、着物だけを投げ込んで人目をくらまして置いて中身は逃げたのだ。

どうでも、しめし合せて智慧をつけた奴がある。

さうして、この場合、一旦、帳消しになつて宿の主人を安心させた宇津木兵馬と、佛頂寺丸山の

兩名が、またしても疑惑の中心に置かれる。立つて無事だと思つたのが、立つた事が却つて疑惑になる。さては、あの連中しめし合せて女をつれて逃げたな。そこでこの疑惑が三人を追ひかけるのも是非のない次第です。

二十二

兵馬は札の辻の温泉案内の前に立ちつくして、安からぬ胸を躍らせてをりました。

さうしてゐるところへ、松本の町の方から悠々寛々として白木の長持をかついだ二人の仕丁がやつて來ました。

兵馬が見ると、その長持には注連が張つて、上には札が立てゝある。その札に記された文字は、

八面大王

妙な文字だと思つたが、はゝあ、これはこの附近の神社から、昨今の松本の鹽祭りへ出張をされた神様の一體か知らんとも考へられる。

兵馬は、その長持のあとについて歩き出したが、この長持の悠々寛々ぶりは徹底したもので、到底行を共にするに堪へないから、或程度でお先へ御免を蒙ることにする。

さうして兵馬が、長持を追ひぬけて有明道を急ぐことしばし。

ほとんど一町ともゆかぬ時に、憂々と大地を鳴らす馬蹄の響きが後ろから起りました。

そこで、兵馬もこれがために道を譲らねばなりません。道を譲つて何氣なくその馬を仰ぐと、これもまた驚異の一つでないことはない。

上古の、四道將軍時代の繪に見るやうな鎧をつけた髯男が一人、巴の紋のついたつららを横背負ひにして、馬をあふつて、まつしぐらに此方をめがけて走らせて來るのです。

をかしい！夷が今時、何の用あつて、この街道を騒がすのだ。併し、それは、やつぱり以前の長持と同じやうに、ある神社の祭禮の儀式のくづれだらう——と見てゐるうちに馬も人も隠れてしまひました。

だが、あの古風な、四道將軍時代を思はせるやうな鎧はいゝが、調和しないのは、あのつゞらだ、あれがあまりに現代的で調和を破ることおびたゞしい。祭禮の歸りに質を受け出して來たのではあるまい、同じことなら、もう少し工夫がありさうなものだ。もう少し故實らしいものを背負はせたら宜からう……と、餘計なことながら、そんなことまで兵馬の頭の中をしげらく往來してゐる時に、

「はい、御免なさいよ、氣がつかないでゐた。今の先、その緩漫ぶりにひとり腹を立つて追ひぬいて來た、あの悠々閑々たる長持が早や兵馬の眼の前へ來て道を譲らんことを求めてゐるではないか。

このまゝ立つてゐると、やはりこの長持にさへ道を譲らねばならぬ。馬も千里、牛も千里だと思

ひました。

そこで、兵馬は思索して、今度はしばらくその悠々閑々たる長持氏と行を共にし、少しく物を尋ねて見たいといふ氣になる。

「この長持の中は何ですか」

「これはね、八面大王の劍でございますよ」

「刀ですか」

「劍ですよ」

「はゝあ……さうして、今、馬で盛んに飛ばして行つたあれは何ですか」

「あれは八面大王ですよ」

「はゝあ……」

兵馬は、それがわかつたやうな、わからないやうな心持で、

「八面大王といふのは一體何の神様ですか」

「左様……」

悠々閑々たる仕丁は、そこで兵馬のために八面大王の性質を物語りはじめました。かういふ場合には、その悠々閑々の方が話すにも聞くにも都合がよい。

八面大王のいはれはかうです。

桓武天皇の御代、巍石鬼といふ鬼が有明山に登つて、その山腹なる中房山に温泉の湧くのを發見し、こゝぞ屈竟のすみかと、多くの手下を集めて自ら八面大王と稱し、飛行自在の魔力を以て遠近を横行し、財を奪ひ、女を掠め、人を惱ました。

坂上田村麿が勅命を蒙つて、百方苦戦の末、観音の夢のお告げで、山雉の羽の征矢を得て遂に八面大王を亡ぼした。

その時のなごりで有明神社の祭禮のうちに八面大王の假装がある。大王にふんする鬼が、付近の女を奪つて歸ると、それを田村麿にいでたつ者が奪ひ返して大王の首を斬るといふ幼稚古朴な假装劇が、ある時代に若い者の手で行はれたことがあるといふ。

つまりはその古式を復興して、今、馬上で走せて行つた鎧武者が、つまり八面大王なのだ、あれが中房へ行くと田村麿の手でつかまります——といふ。

最初の時代には、何でもあの八面大王が、そこらにゐる合はす女ならば、女房でも娘でもかまはず引さらつて生のまゝで荒縄で引かひで行つたものだが、今は相當遠慮して、女はあのつよらの中へ入れて参ります——といふ。

では、あのつよらの中には、かりに掠奪された女がゐるのか——その女こそいゝ迷惑だと兵馬が笑止がりました。

二十三

かうして佛頂寺、丸山等は煙の如く長野へ向けて立つてしまひ、宇津木兵馬は北アルプス方面の懐ろへ向つて参入せんとする場合に、ひとり道庵先生と米友のみが、同じところに止まつてゐるべき理由も必要もある筈はありません。

果して道庵先生は、起きて朝飯が済むと共に床屋を呼びにやりました。

床屋が來ると、先生は従容として鏡の座に向ひ、何か心深く決するところがありと見え、

「エヘン」

とよそ行きの咳拂ひをしました。

床屋は先生の心のうちに、それほど深く決心したところがあると悟る由もありませんから、やはり、従前通りのこの物髪を整理して念入りに撫でつけて、別製の油でもつけさへすれば仕事が済むのだと、無雜作に考へて、先生の頭へ櫛を當てやうとすると、

「待つてくれ——少し註文があるですからね」

と右の手を上げて合圖をしました。

是非なく床屋が、櫛をひかへて、先生の註文を待つてゐると、

「ところで、床屋様、わしは今日から百姓になりてえんだよ……武者修行はやめた〜」

といひましたから、床屋はよくのみ込めないでゐると、道庵が、

「うまく百姓にこしらへてくんない！ 茨木屋のやつた佐倉宗五郎といふあんべえ式に一つやつてくんない！」

「お百姓さんのやうに、髪を結び直せとおつしやるんでございますか、旦那様」

「さうだよ、すつかり百姓面に造作をこしらへ直してもらひてえんだよ」

そこで床屋は變な顔をしてしまひました。見たところ、相當に品格もある老人で、少々時代はあるが塚原卜傳の生れがはりといったやうな人品に出来てゐるから、相當の敬意を以て接して見ると、口の利き方がゾンザイであつたり、いやに御丁寧であつたりして、結局、この惣髪を普通の百姓に見るやうな鬘に直してしまへと註文であります。床屋が當惑してゐるに頓著なく、道庵は、鏡に向つて氣焰を吐き、

「百姓に限るよ、百姓ほど強い者はねえ……いざといへば、誰が食物を作る、食物を作らなければ人間が生きてゐられねえ、その生命の元を作るのは誰だ——と来る、この理窟にや誰だつてかなはねえ、武者修行なんざあ甘えもんだ、おれは今日から百姓になる！」

さては先生、先日の芝居で、信州川中島の百姓達が、大いに農民のために氣を吐いたのを見て、忽ち心酔し、早くも武者修行を廢業する氣になつたものと見えます。つまり先生の考へでは、武藝で人をおどすなどはもう古い、食糧問題の鍵をすつかり自分の手に握つて置いてかゝらなければ

ば、本當の強味は出て來ない——といふやうなところに頭が向いて、自然一切の造作をこしらへ直す氣になつたものと見えます。

床屋は、やむなく、註文を受けた通りに造作にとりかゝる、惣髪は惜し氣もなくそり落して丸額にし、びんのところはグツとつめて野暮なものにし、まげのところも成るべく細身にこしらへ上げて、やがての事に、百姓道庵が出来上つてしまひます。

道庵つくづく、その百姓面を鏡に照らし合せながら、

「尙書に曰く、農は國の本、本固ければ國安しとありて、和漢共、農を重んずる所以なり、農事の輕からざる例は禮記に正月天子自ら來耜を載せ給ひて諸侯を從へ、籍田に至つて、帝耕し給ふこと三たび、三公は五たび、諸侯は九たびす、終つて宮中に歸り酒を賜ふとあり、天子諸侯も農夫の耕作を勤むる故に飢を知り給ひ、然りとて、官ある人、農を業とすべきにあらざれば、年の首、農に先だつて、聊かその辛苦の業を手につれ給ふ、實に勿體なくも有がたき事ならずや……」

滔々としてやり出したものですから、これは氣狂ではないかと、床屋が顔の色を變へました。かくてその日、この宿を立ち出でた道庵先生の姿を見てあれば、わざと笠をぬいで素顔を見せたところ、豎縞の通し合羽の著こなし、どう見ても、印幡沼の渡し場にかゝる佐倉宗吾といった氣取り方が、知つてゐる者から見れば、ふざけきつたもので、知らない者はあたり前のお百姓と見て怪しまぬほどに、變化の妙を極めてをりました。

さて、そのあとから、少し間をおいて續いた宇治山田の米友、これは前來通りと別に異状はあり
ません。

行き、行きて、この二人が例の芝居小屋の前まで来ると、数日前の景氣はなく、立看板に筆太く

「大衆演劇、近日開場」

と書いてありました。

それを見るに、道庵先生が足をとどめて、しばらく打ちながめ、

「は、あ、大衆演劇」

と首を傾げました。

大衆とは一體何だらう——道庵は類にそれを考へながら足を運び出しました。そこで獨りごと。

大衆といふのは「坊さん仲間」といふことで、よくそれ、太平記などに一山の大家とあるが、大衆が芝居をやるといふのは解せねえ、坊さんが出て芝居をやるといふのはわからねえ、いかに物好きな坊さんだつて、芝居小屋を借りて坊主頭を振り立て、踊らうといふほどの豪傑はなからう、第一、それでは寺法が許すまい、狂言綺語といつて文字のあやでさへもよしとはしない佛弟子が進んで芝居をやり出さうとは思はれぬ。して見ると、これは、つまり坊さん役のたんと出る芝居だらう、たとへて見れば道成寺といったやうに、坊主が頭を揃へて飛び出す芝居かも知れない、そこで大衆演劇と名をつけたんだらう、さうに違ひない、さうでなければ「かつぼれ」かな……

喜撰でも踊るのか知ら。

この大衆の文字が少なからず、道庵先生をなやませました。

さうだ——おれは大衆といふ文字を一途に坊さんの方へばかり引きつけてゐたのがよくない。外典のうちに、つまり漢籍のうちに、この大衆といふ文字はないことはなからう、さてよ、今、天性備へつけの百味筆筒を調べるから——

道庵先生は、自分の頭の中の百味筆筒をひっくり返して類に調べにかゝつたが、結局、ドコかでその大衆といふ文字を見たことがあるやうに思ひました。尙書ではなし、禮記ではなし、四書五經のうちには、大衆といふ文字はねえ……して見ると諸子百家、老莊、楊墨、孟子、その邊にも大衆といふ文字は覚えがねえが……でも、どこかで見たやうだ。左傳か、荀子か……
實に餘計な心配をしたもので、お手前物の百味筆筒の引出しを一一あけて、薬を調べるやうな心持で、僅大衆の一句のために、道庵先生が苦心慘憺をはじめました。

宇治山田の米友においては、一向そんな事は苦にしてゐない。

かれは精悍な面魂をして、多田嘉助が睨み曲げたといふ松本城の天守閣を横に睨み、

「何が何でえ、馬鹿にしてやがら」

といふ表情で、松本平の山河を後にして歩きました。

したが、しばらくあつて、何に興を催したか、宇治山田の米友が、松本の町はづれで、ふと大き

な聲を出して、

十七姫御が旅に立つ

それを殿御が聞きつけて

留まれくと袖をひく

それで留まらぬ者ならば

馬を追ひ出せ彌太郎殿

明日は吉日日もよいで

産土参りをしませうか

宇治山田の米友が唄をうたひ出したので、驚かされたのは道庵先生です。

「友様、お前も唄をうたふのかい」

大衆の空想も何もすっかり忘れて道庵が驚嘆しました。

二十四

中房の温泉についた宇津木兵馬は、取り敢ず宿について、様子を見たけれど、これぞと心當りの者もない。

一軒の温泉宿が中房の總てあります、どれを見ても、みんな素性の知れたもの、たゞ一組、匪

け落ち者らしいのがあるといふ話だから、それとなく探つて見ると何の事、田舎の新婚の夫婦が他愛もなく、じやれてゐるだけのもの。

兎に角、その夜を明かして翌日。兵馬は爐邊にゐて、焚火にあたりながら入り變り立ち變る人、といつても、さう多くの數ではないが、それをとらへて自分が主人顔に話をして見る。この夏中からかけて入浴に來た客のそれ々々について、探りを入れて見る。ついでにこの温泉や、付近の人情風俗を聞いて見る。

内湯もある、外湯もある、蒸し湯もある。レウマチや、胃腸の病氣や、勞症や、膈病に利き、婦人の病や、花柳病の熱にも効があるといふことで、婦人客が意外の遠くから來て長く逗留することもあるといふ。

次にこの宿の設備を見ると、棟が幾つにも別れて室の數は五十以上もありさう。その中には人のありさうでないものもあらう、なかりさうで隠れ療治を試みてゐる者があるかも知れない。殊にこれら奥の野天にある蒸し湯の設備は、熱氣のわき出すの上に簾床をこしらへてよもぎを敷きつめ、その間を通してのぼる湯氣で温まるところがあるといふ。そこへも一應行つて見なければならぬ。

程經て、兵馬はその爐邊を立ち、數多い棟々のいくつもの部屋を調べに出かけました。ほとんど全部が空いてゐる時分でしたから、何の挨拶もなしに兵馬は障子を開けては、部屋々々を見、ま

た何の挨拶もなしに出て、五十餘りと覺しき部屋の大部を檢分して見ましたけれど、どれもこれとは怪しむべきものは一つもない。

たゞふさがつてゐるのが三つあつて、その一つは、長野あたりの夫婦者と、もう一つは松本邊の御隠居らしいので、何等怪しむべきものもない。たゞ、そのうちの一つに人がゐるのだから、いのだかわからない暗澹たるものがありました。

兵馬が、のぞいて見ると、蒲團部屋になつてゐる。蒲團が山の如く積まれた中に、どうも氣のせゐるか人がゐるやうに思はれてならぬ。女中でもゐるのか知らず最初は思ひましたが、女中部屋は帳場から遠からぬところにあるし、第一、こんなかけ離れたところへ女を置く筈はない、では夜番の者でもゐるのか知らず、それもうけ取れない。

兵馬は、そゞその部屋だけに多少の心を残しましたけれど、一面に蒲團が積み込んであるのだから、それを押しくづしてまで侵入する氣にはなりませんでした。

いづれまた篤と……そこでまた爐邊へ歸つて無駄話をしてゐると、ふと氣がついたのは、もつと以前に氣がつきさうであつたのに——今になつて氣がついたのは、あがりはなに隅の方へ押しつけられて、つゞらが一つ置きばなしにされてあることです。あまり無造作に置き捨てられてあるから、それで却つて兵馬の氣がつかなくなつたとも思はれます。

つゞらといへば、どんな山の中にも備へてある日用器具の一つだが、兵馬が特に見覚えのある

やうに感じたのは、そのつゞらに巴の紋がついてゐること、さうして、きのふの途中、四道將軍のやうな鎧武者がしよつて馬に乗つてまつしぐらに走らせた、それがこのつゞらに似てゐる、いやそれに相違ないのだと兵馬は信じた。

ところで、あれは例の八面大王に扮したのが、古例によつて、女を奪つてあれに入れて、この山へ來たのだ、さうして田村鷹將軍の手でその女を取り返されたのだといふことになつてゐる——では一つ、その納まりを聞いて見やうではないか。

それを聞いて見ると、誰もとんと返事の出来る人はない。

第一、そんなお祭りの古例をさへ知つた者はない。このつゞらにしてからが、誰が持つて來て誰が置きばなしにして置いたのだから、それすら満足な返事を與へるものがない。

この上、尋ねるすべもなし、また必ずしも探究する必要もないので、兵馬は引き返すうちに夜になりました。

どてらを重ねて夜の寒さを防ぎ人定まつた後といふけれど、晝のうちから、ほとんど人の定まつたやうなところを、兵馬は小提灯をともして、ひとり廊下を歩いて例の廣い部屋々々の外を通つて見ました。

併し、かりそめの目的は、例の蒲團部屋にあるので、あの蒲團の背のうしろには僅に二人三人の人をかくし住まはすには餘りがある、と斯う睨んだのを見過ぎすわけには行きません。

程なく、その部屋の前に立つて様子をうかがふと、これは意外千萬。——たしかにこの蒲團の砦のうしろあたりで火影がする。薄明りながら火をともし、その中に隠れてゐるらしい人があるらしい。

さしつたりと兵馬は胸ををどらせました。そのまゝ、蒲團を押しくづして亂入しやうかとさへ思ひましたが、それでも前後を思案するの分別だけは残して、さて、中をつきとめるには、どういふ手段を取つたらよいか、無茶に亂入すれば敵の備へがないともいへぬ。尋常に訪うては、いよく敵に警戒を興へるばかり、雨戸越しにでもはいる手段はないかと、調べて見たが、これもおぼつかない。

是非なく、兵馬は、この蒲團の砦に向つて正面攻撃を行ふ外はないと思ひ、小提灯をたのみに、充分の用意をもつて一方から、その蒲團を崩しにかゝりました。

兵馬が、二三枚の蒲團を崩した時分に、中ではフツとその火影が消えてしまひました。ふき消したものに違ひない、こちらの侵入を氣取つて、非常に狼狽してゐるやうに思はれる、狼狽したかたとして、逃げ場はあるまい、はいるに不便なところは出づるにも不便な筈。兵馬は前以てこれを見届けて置きました。

さうして、一方の手で、ふとんのとりを崩し崩して行く間に、洞然として、遮るものゝなきところ達しました。

「誰あれ！」

暗い中で狼狽しきつた聲は女でありました。兵馬はそれに答へないで、自分の手にある小提灯をつきつけて見ると、女が一人、枕屏風の蔭にふとんから起きかゝつてゐる。その外には誰もゐないやうです。

「誰あれ！」

と女はおどろしながらかがめたけれど、存外、度胸があるのか、此の不意の侵入者に對しても世の常の女が騒ぐほど騒いではゐないらしいのが不思議です。

「あなた一人ですか」

と兵馬がいひますと、

「えゝ、一人よ、何だつて斷りなしにはいつて來たの」

やはり女は悪びれずに、却つてこちらをとがめるだけの餘裕さへあるのを、兵馬は案外の思ひをしてゐると、

「あら、あなたは、あの淺間のあのお客様ぢやなくつて、まあ、この間は失禮を致しました」

「おゝ、お前はあの人か」

その時の闖入者は、こゝでは地を變へてしまひました。闖入して來たのは宇津木兵馬であるが、その闖入に驚かされた人は身なりこそ變つてゐるが、あの手古舞の酔つばらひ藝妓に違ひない。

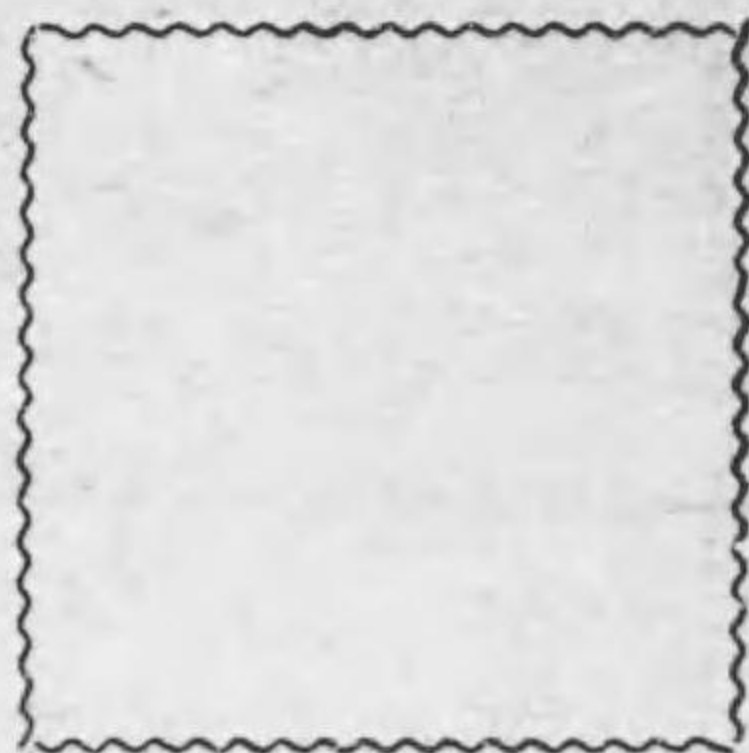
めぐり合ふべき人にめぐり合はないで、めぐり合ふ必要がない人が、ついで廻る結果となる。兵馬は自然としていふべき言葉を失ひました。

六九六

みちりやの巻了

大菩薩峠 (新定版)

昭和四十四年四月二十三日新定版第一刷印刷
昭和四十四年四月二十八日新定版第一刷發行



一册【定價】 壹圓五十錢

著作者 中里介山
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
發行者 野口兵藏
東京市牛込區矢來町三六
印刷者 本間十三郎
東京市牛込區矢來町三六
印刷所 清揚社
東京市豊町區飯田町一ノ六
製本所 河手製本所

東京市日本橋區吳服橋二ノ五
發行所 大菩薩峠刊行會
振替東京七五八三〇
電話(日本橋)一七七
隣人之友社 藏版

大菩薩峠

(版定新)

(錢貳拾册各料送)・錢拾五圓壹册各價定・册五十第一册一第

第五册 無明骨の巻(上)	第四册 黒業白業の巻 安房白業の巻 小名路の巻 禹門三級の巻	第三册 如法闇夜の巻 お銀様の巻 道庵と鱈八の巻	第二册 東海道の巻 白根山の巻 女と小人の巻 市中騒動の巻 駒井能登守の巻 伯耆安綱の巻	第一册 甲源一刀流の巻 鈴鹿山原の巻 壬生島原の巻 三輪杉の巻 龍神の巻 間山の巻					
第十五册 農奴の梗概	第十四册 恐山の巻	第十三册 新月の巻	第十二册 白雲の巻 膽吹の巻	第十一册 不破の關の巻	第十册 辨信の巻	第九册 畜生谷の巻 勿來の巻	第八册 年魚市の巻	第七册 めいるの巻 鈴慕の巻 Oceanの巻	第六册 他生の巻(下) 流轉の巻 みちりやの巻

「新定版」「普通版」共に第三册は「伯耆安綱の巻」の後を承け「如法闇夜の巻」に始る

大菩薩峠

(版通普)

(錢貳拾册各料送) 錢拾五圓壹各價定・册五十第一册一第

第五册 無明骨の巻(上)	第四册 黒業白業の巻 安房白業の巻 小名路の巻 禹門三級の巻	第三册 如法闇夜の巻 お銀様の巻 道庵と鱈八の巻	第二册 東海道の巻 白根山の巻 女と小人の巻 市中騒動の巻 駒井能登守の巻 伯耆安綱の巻	第一册 甲源一刀流の巻 鈴鹿山原の巻 壬生島原の巻 三輪杉の巻 龍神の巻 間山の巻					
第十五册 農奴の梗概	第十四册 恐山の巻	第十三册 新月の巻	第十二册 白雲の巻 膽吹の巻	第十一册 不破の關の巻	第十册 辨信の巻	第九册 畜生谷の巻 勿來の巻 大菩薩峠是非	第八册 年魚市の巻 大菩薩峠是非	第七册 めいるの巻 鈴慕の巻 Oceanの巻	第六册 他生の巻(下) 流轉の巻 みちりやの巻

中里介山著作

大菩薩峠繪本

定價貳圓五拾錢
送料十六錢

第一冊 「甲源一刀流の巻」より「間の山の巻」に至る

中里介山題文字
井川洗厓序文
代田收一厓繪圖
野口昂明本繪
介山居士の親切な序文題字と、洗厓畫伯の艶麗な彩色繪「大菩薩峠十人女」圖と代田收一氏の綿密な内容繪圖面と、それから新進畫家野口昂明君が心血を濺いだ書面が百十八枚、何とも云はれない懐かしみのある繪本である。

中里介山著 大菩薩峠 形脚本

四六判一五〇頁
定價一圓三十錢
送料十錢

小説「大菩薩峠」は衆生業相の展開を曲盡し、その遊戯神通を寫して遂に入曼陀羅の實相に歸するの結構なるを以て之を形譯して上演する際は此の意義に準據せざるべからず、本書は田中智學氏の紹介により嘗て帝劇にて興行の所謂演劇以上の社會的教化を期待して許諾した際の脚本と、同じ意義に於て歌舞伎座に於て興行したる脚本とを取纏めて一本となしたるもの。

——呈進録目書圖——

大菩薩峠刊行會發行

中里介山著

吉田松陰

三六判三百二十頁

定價七十五錢

送料九錢

革新教育の権化

本書は維新革命の典型的志士、吉田松陰の生涯を一々根據ある書物によつて、平明忠實に寫した傳記である。維新の先覺としての非常の士松陰を知ると共に、天成の教育家として師道の嚴たる、友愛の切なる、最も濃かなる心情を備へた、僅々三十年の人間の生涯を飾ることなく表現した、極めて意義深い力著である。今や國家總力を擧げて興亞新秩序建設の大業成就に邁進せんとする秋、また新たにこの人物及び學風を再検討するの必要を痛感し、茲に増刷改裝して敢て江湖に獎むる所以である。

中里介山著

續日本武術神妙記

四六判上製・二五〇頁
定價一圓五十錢
送料十錢

——呈進録目書圖——

大菩薩峠刊行會發行

中里介山著 四六判美裝四一六頁

日本武術神妙記


定價 一圓
送料 九錢

日本は武術の天才國である、これ神武天皇建國以前以後を通じての國民性であつて、決して蠻力の變形でも無ければミリタリズムの發現でもない。今や日本精神、日本精神といふ聲が一代に滿つるけれども、日本武術の神妙を知らなければ、日本精神を理解することは出来ない。日本武術のうち、戰國時代より徳川初期へかけての「流派」創生時代が即ち武術が科學的となり藝術的となつて、この神妙を表象したのである。本書は兩來維新前後に至るまでの、數百流の日本武術の粹を抜き、各々典據ある記録により、含蓄豊かな筆を以て、その神妙の仕合、悟道、實驗を寫したものである。従つて、舊來の小説講談の荒唐無稽を一掃し、技術の神妙が超人間に達する極意を教ゆることに於て、天下萬人の爲に此も無き修養書である。

東京橋本區大菩薩峠刊行會 振替 〇三八五

389
17
227

終



大會刊行